390.4
Ku27

1

0055236000

0055236-000

390. 4－Ku27ウ

決戰墓ら

沓掛享治郎・著

駿々堂

昭和18

AJA

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年3月2
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので

466

390.4
KU27

決戰碁ら

扉題字

大政翼賛會福岡縣支部長
福岡縣知事　本間精閣下

979
193

序

本書を一讀するに、何等の扮飾も何等の衒ひもなく極めて、平明卒直の中に、著者が帝國軍人としての氣魄信念と、翼賛人、否、戰ふ日本國民としての矜持に根基する、烈々たる憂國の至情より迸る警世の箴言全篇に漲り、時に群鷄中一鶴的の朗諷と、雅韻あり、人をして愉しませつゝ決戰必勝道に透徹せしめんとする、熱魂溢るゝ筆風は正に決戰下に於ける國民必讀の良書として推奬措く能はず、茲に、聊か辭を贈りて序となす。

大政翼賛會福岡縣支部庶務部長
首藤　謙

自序

わたしは、まだ極めて未熟な人間である上に、文人ではなく一介の武辯でしかないそのわたしの書いた本書を讀まれる人達ちは、或は落膽されるかも知れぬと惧れても見た。

併し、身分が躬を以て體驗した所と、その他の見聞や觀察とに基いて「戰ふ日本國民は如何にあるべきや」に就て、乏しきを省みず考察を下しながら書いて見たものである。

今や國民は、一切の力を結集して斷乎此の大東亞戰爭を勝拔かねばならぬ。その心と體の構へも固より不動鐵石である、その鐵石心の前には最早理論も、理窟も必要としない。唯實行上に於ける「斷」あるのみである。

が、果して捷つための實踐道に透徹しきつてゐるであらうか、今一息といふ部面はないであらうか?。そこでわたしは不文に鞭打ちながら、一應戰時國民の實際的生活内面を剔抉し、其の間に闘ふ人達ちにおほらかな氣持と、力强い熱氣とを供給したいと念じ、苦い筆鋒の中にも程々に諧謔と、朗諷を取り合せ少くも愉みながら讀めるものにしたいと、敢へて短篇の組合せものとしたが、特に此の中に實踐第一主義に徹底した眞劍な戰爭意識を脈絡一貫させ、決戰必勝驀進道を强く盛り上げたつもりなのである。

殊に、わたし自身も帝國軍人として或は翼賛人として眞に戰ふ日本人としての精魂を打込んで書いて見たと云ふ點に、聊か自惚も手傳つて、題して「決戰驀ら」と名打つたのである。そうしてなんとか今日闘ふ人々のお役にたゝせたいと云ふ、柄にもない慾念も生じて、言文を煉り、體裁を飾ると云ふ事よりも時局的な情熱で、所謂「拙速」で往くことゝし、新舊の稿を慌だしく纒め上げて決戰場裡に送り出したのが本書である。

乞ふ、抂げて愛讀されんことを。

同時に、ひとしく戰ふ皇國民としての胸奥に多少たりとも相通ずる所ありて、共に

偖に大戰必勝道に邁進する上に、稗益するものあらば洵に幸ひである。

尙、本書を成すに當り、大政翼賛會前福岡縣支部長本間精閣下を始め同支部幹部各位より多大の御後援を忝ふしたる事は、最もわたしの光榮とする所で、厚く感謝の意を表する次第である。

昭和十八年[illegible]夏

著者しるす

目次

一、征還譚……五
二、防空斷想……二五
三、戰爭と鰻……八九
四、腐魂・清魂……一一五
五、翼壯の活動……一三五
六、隣組の母……一六九
七、感奮興起する隣組……一九五
八、青少年學徒に望む……二二七
九、强母と强兵……二四七
一〇、新穀感謝祭……二六九

目次

一一、決戰下の宰府梅信……二七五
一二、決戰産業魂……二八三

（目次終り）

裝幀並繪　中部軍報道部　池田鮮喜

決戰驀ら

沓掛享治郎著

一 征還譚

――戰爭は確かに、偉大なる指導家であり、また警世家でもある――。

支那事變が始つて間もない或る日、私の勤めてゐた學校の同窓會が開かれた、私が軍服でゐた故もあつたらう、同窓會長や、會員一同から支那事變に就て一席話せとの註文が出たが、何の用意もしてゐないので辭退したが何分にも時が時で、同窓會は宛然、暴支膺懲必勝大會と選ぶ所なく、其の意氣當るべからずと云つた雰圍氣を示してゐるので遂に、退け兼て、滿洲事變の所產たる冀、東察政權の成立から、國防上より觀たる北支、特に京津周邊地區の特殊性と、新聞、ニュース等に依て當時知り得た資料に基き、事變の發端から、その頃までの戰況の概略を話した。

のち、若い卒業生の爲に質問の時間を與へた所二、三の質問があつたが、最後に、「先生この情況だと、不擴大方針も、もう望み難いでせうが、日本が本腰に支那を叩きつけるとして、實際採算が取れませうか？」

との質問である。而も一人の職員であつた。（その問ひの意味は、明かに勝敗に對する疑惧と云はんよりは、採算が取れるか、莫迦らしくはないかと、と、云ふ意味にちがひはなく果して眞面目であるかを、疑つて見たが、本人は列席者の前で至つて大眞面目なのであつた）

此の愚問には、私も聊か茶化された樣な不愉快を感ぜずにはゐられなかつた、同時に又、實業學校の先生だけに、遠に算盤高いと、思はず噴き出したくなつたのを、やつと嚙み殺したのであつた。今から考へると、虛のやうだが國民の中には、隨分認識を缺ぎ變な考へ方をする人が、かなりあつたやうである――。

そこで私は、古來今往日本は、聖戰と銘打つもののほか安りに、戰さはしない。諸外國の歷史に見るが如き、そろばんで戰さをする事は絕對にあり得ないことを、瞭きり說いて得心させたことは云ふまでもない――。

その翌日は、七月二十一日で定例の暑中休暇が始つた。

その當時は、まだ何處の部面も明治以來の悠々閑々な姿であつた。――今にして思へばである――。

それから間もなくであつた。數年に亘つて手鹽にかけ、而も滿洲事變では終始生死

苦樂を俱にした、阪神地方の敎へ兵達が私を中心に何とかの會合をするから上阪せいとの電報に接したので、すつかり旅裝を整へ明くる朝出發と云ふその晩に「ミンナ×××サレタ」との電報を受取つた――それから一時間の後、自分も〇〇を拜受したのであつた。

★

家を、街を出る當時の歡送振り、熱狂振りは――到底筆舌に盡せるものではなかつた。

群集の渦に卷かれ、ホームに出た後も袂ならぬ軍服の物入れに、餞別やお守り札を押し込まれる、中には現金のまゝのもあるし顏も見られぬ、言葉もかけられぬ騷ぎであつた。

餞別の主は、頤髯無口で栗鼠のやう
征く感激は旗々顏々修羅場裡

固より柳句として見るべきものでなく、私の當時國民から受けた感激の眞率なる備忘的記錄でしかない。

それからは、內地の或る部隊で、大陸の空を睨みながら脾肉の嘆に燃へ爛れるやうな四ヶ月の月日が流れた――。

――昭和十二年――事變勃發の年も末に迫つた或る日私は、一隊の長として、又部隊の輸送指揮官として、某方面に向ひ出發すべき重大任務を拜命した、正に四ヶ月の雌伏より解放されたのである。其の重任、光榮、感激、嬉しさは譬へやうのないものであつた。同時に又斷腸の悲しさもあつた。

炎熱の續いた四ヶ月間精魂の限りを盡して育て上げた、而も出發の前々日檢閲を受け能く出來た、戰士に成りきつたとお褒めに與かり刻印を打つて戴いた、その可愛自分の敎へ兵を一人も連れて行けず、皆――古參兵ばかりの一隊であることだ――私は軍命ではあるが、堪へきれぬ程の淋しさに泣いた、より更に兵がみんな泣いた――。

――强かるべき私共軍人も人の子である、斯うした人一倍の感激も嬉しさもあるかはり又一倍の深刻な悲愁も當然ある、けれど餘人には分りかねるものである――分つ

てもらひたいなどと弱音も吐かぬが――。併し軍人本然の任務と名譽の前には、取るに足らぬ小いさな〳〵私ごとに過ぎぬ、だから、さあ當分の間の別れとなると私も、兵も本當に軍人らしく、男らしく別れをした――驛頭に於ても、私は特に心して儼然たる態度と、言辭を以て、知事閣下以下に挨拶を述べて、國民大衆の熱誠に應へたのであつた。

其の夕方〇〇港に著いて、さらに同夜目的地に向つて出帆したのだつた。

偖てまた同夜、出帆時に於ける光景たるやだ、歡送國民の旗波は阜頭と云ふよりも陸岸一帶を埋めつくして附近の建物の屋根までも溢れてゐた、熱叫する萬歳の聲は天地を震撼し、引くテープは船を後ろへ牽き戻しはせぬかとさへ感じた、――大袈裟な形容だが、僞らぬ實感であつた――。

――とに角あの頃の國民の熱烈さは、實際抑へようとしても抑へきれない形への顯はれであつて、今想ひ出しても身奮ひを覺へるほどの極絶した美はしい光景であつた――。

★

――それから、北支方面に於ての全る〇年間が經つたのである――。

大體は銃後國内の狀況も識つてゐたし、ものには限度がある、あの當時のやうな狂熱振りが遺されてゐやうとは、固より考へてゐない、それより一等大切なことは此の事變なるものが――否大東亞共榮圏完成は、どれだけの犧牲が拂はれ、何年間軍民の苦鬪が續けられたら其の目的を達するものであるか、堅忍不拔の持久態勢に移つてゐるであらうか、今自分達が具さに血を以て體驗し、現實に觀取つて來た事變の前途の實相を國民は眞劍に、認識してゐて呉れれば良いが――。

――こんな過去と將來に對する思索に耽つてゐる、私共幹部ばかりの一隊を乘せた船は、あれから〇年後の此日再び、往く時と同じ航路を經て還つて來たのである、船は間もなく着いた、併し征く時とは違つて棧橋も壁橋もない見上ぐるやうな岸壁で、まだ午下りと云ふのに人の子一人も見られぬ靜かさであつた――。

船員の合圖で〇雙の浮舟がつけられた、各自が手荷物を擔いで移乘し四―五分の後

倉庫らしい裏通りに着けられ、やつと懐しい故國の土に第一歩を踏み入れた――瞬間言ひ様のない嚴肅な氣持ちに全身が、カッと熱くなるのを覺へた――此懐しい、故國の土を踏みながら、なんとした事か誰もが、はじめての外國の港にでも上陸して見た時のやうな、呆然自失の態であつた、眞に感慨深いものがあつた――なるほど人生の何十分の一でしかない期間ではあつたが滿支旅行の類とは確かに還庭があつた――唯體驗した自分達のみが知つてゐれば良いことである。

間もなく廳舍から税關吏らしい、一人が出て來て嚴かに言つた。

「皆さん今から荷物の檢査を實施しますから、前庭まで運んで開梱し展げて置いて下さい。」

各人の手に依て運ばれ解梱の上綿密な檢査が行はれ、終つてから税關吏氏は言つた。

「皆さんは軍裝品の外は何もお持ちにならぬが感心しましたよ。」

變な感心をして呉れたものだと思つた。それでも、誰かが應へた。

「他に持ち様がありませんよ。」

「では是で檢査は終りました、おひき取りになつて結構です。」

と思ひの外叮嚀だといふ感じがした。

けれど「感心しましたよ」には何となく不愉快なものがあつた、あれが職業意識と云ふのであらうかと思つた――私は心の中で――御安心下さい、私共は日本〇〇です、而も普通の旅行人でない事も御存じでせう。御覽の通り野戰姿の儘なんです、土産物漁りをしたり、そんな氣分も餘裕もありませんでした。實際に陣中の常として輸送船等の都合もあつて非常な急命令であつたから、中には〇〇中に飛行機で交代したものもあつた程で、我々は何時でも死ねる仕度でゐることを常日頃の嗜みとして來ましたよ……と、答へて不快さを自分で打ち消すことに努めた。

――部隊はそれから列車に依つて西の或る部隊に向ふのである。それでみんな船中で着崩れのした、服裝を整へた。

私も脚絆を着け替ようとして、脱した刹那短袴の裂け目から音もなく地上に舞ひおちた物があつた。手に取つて見ると細い一本の枯草で、長さ六センチばかり、可愛ら

しい穂先きが保たれてゐたが實は一つも着いてゐなかつた、能く見ると正しく西北支那の某地でよく見かけた芝草の一と莖に相違なかつた。くつついて來たのだ。

私はトタンに嬉くなつて戰友達に見せた。皆周圍に集つて來て、絶へて久しい友にでも逢つた樣な格恰で一人ひとり手に取つて、子供の如くはしやぎ、珍重がつてゐた。

恰度その時だつた、破れ鐵のやうな聲で怒なつた者がある。

「蝟集してはいけなーい、砲彈が來るぞつ。」

に期せずしてぱつと散つた——と、間髪を容れず、ワアーッと云ふ爆笑が起つた——歸還上陸後はじめての笑ひである——。

振り返つて聲の主を見ると、向ふの方で下着を替るため裸になつてゐる一人がゐた平素豪快沈毅の中に時々辛辣な諧謔も吐き人を笑はせるので有名なO中尉であつた。

遲ればせに私の側に近寄つたO中尉も、枯草を手に取つて見てゐたが、又彼れは大聲で言つた。

「オイ、此れも稅關檢査もんだぜ。」

に、一同またドッと洪笑——歸還後第二回目の笑ひであつた——。

O中尉から、枯草を受取つた私は良い記念品が思はぬはづみから手に入つたかくしきれぬ愉悅と共に、確とお守袋に收めた。

附近には一人の老媼と四—五人の兒供が遊んでゐたが、豪磊な我々の大陸笑ひを、眼を丸くして聞きとれてゐた。稅關の屋上に掲げられた標旗は初冬の澄み切つた空に、はた〳〵と鳴り、大陽はぐつと西へ廻り私等は稅關の建物の影の中に在つた。

★

——忙しい乘車準備が終つて、みんな久方振りに、自分の國の二等車に納つて凝つと、顏を見合せた、歸還勇士を乘せた列車の汽笛は威勢よく鳴つた、しかし靜かに滑り出した、この時始めて日本の地に完全に還りきつたやうな感じがした——が何故か皆が言ひ合せたやうに口をきかなかつた。

右手に見ゆる海上や陸の風景をいとも感慨深げに、中には半身を窓より乘り出す樣にして眺め入つてゐた。

――恐らく誰もが、私と同じ樣に深い今昔の感慨に耽つてゐたのではなかつたらうか――。

嗚呼、征く時のあの街、あの海、あの阜頭、あの旗波、萬歳、熱狂振り、あんな感激つたらなかつた――。

あれから〇年、正に夢としか考へられない。――あの時一緒に征つたものの中で、今此の列車に乘つてゐない顏が確かにある、そう〳〵S中尉と、T中尉だ、Sは〇〇の戰鬪で、Tは〇〇作戰の時だつた、あつそうだつたT中尉はあの時もう口がきけなかつた。頻りに眼と、頤で東の方を指すので、體を向けてやつたら如何にも滿足そうに、こくりと頷いて見せた、そうして微かに唇を動かして心持ち右手を擧げる氣配があつたと見ると間もなく眠るやうに――。あの時　大元帥陛下の萬歳を唱へたのであつたらう――。

おーも一人ある、Aぢ尉だ、なあAよ、君の戰死は餘りにも深刻すぎたよ、〇〇命令の發せられた其の日の戰鬪に戰死するなんて、併し軍人として本望であつたらう、

俺はあの國民の熱烈な期待にも聲援にも、應ふべき働きなくして斯うして還つて來たが肩身が狹くて申譯ない氣持で一杯だよ、――洵に濟まぬ、許せよ――。

俺達はきつと君達の分までやるからなあ、やらんで置くものか、安心して呉れ――。

待てよ何かまだ。あつそう〳〵征く時に一緒であつた下士官兵は、今日はゐる筈もないのだが、あちらに殘つてゐる者の顏を見渉しても既に歸還した者の顏を想ひ出して見ても、隨分缺げて來たなあ。そうだK上等兵もその缺げた顏觸れの中の一人だ、〇〇の下宿を引き拂つて內地を出發し、あちらに征つてからも引き續き、肉身の弟の樣に世話をして呉れた、出發の前夜下宿に訪ねて來たお前は、いつもの口重さで、昨日私を送つて呉れるつもりで面會に來て呉れた母が、心殘りの無いやうに存分の御奉公をして來い、それから中尉殿に若しもの事があつたら、お骨を拾ふこともお前の大切な勤めだぞ、と言ひ聞かされました。私も其の積りであります。そこで御願ひですが中尉殿、私が若しも一歩さきに戰死するやうな事があつたら中尉殿は私の骨を拾つて呉れませうかと、あの時の顏は眞劍だつたなあ、今でも忘れてゐないよ、俺も本當

に、譬へ様のない感情で胸も一杯だつたので、――尤もいつものくせでもあるが――「勿論だ、早く歸營して今夜能く寢ておけつ」と怒なるやうに言つただけだつたなあ、併しあの場合なにも言へなかつたよ、そのかはり俺は約束を忠實に守つたよ、お前は隊中でも評判の分隊長に出世した。そして○○省方面に於ける春季反攻作戰に耀く武勳を樹てて壯烈無比の戰死を遂げた、俺は不信と云ふか、不幸と云ふか最後の最後までは行を共にする事が出來なくて斯うして生きながらへて還つて來たのだ。で、約束の通りあの當時お前の遺骨を拾つて、お前が口癖のやうに話してゐたお母さんの所へ送り屆けたのだよ、俺は弟と云ふものを持つた經驗はないのだがお前を戰死させた時は、　陛下の兵を喪つたと云ふ責任感と更に肉しんの弟を死なしたなら斯うもあらうかと心から泣けたよ、暫くはお前のむつつり顏も陣中に見られなくて寂しかつた。――今この列車の中も一入ほ淋しいよ――。お前の原籍は○○縣の○○村だつたなあ、軍用務が終つたらすぐ訪ねて行き、あの當時の目醒しい働き振りをお母さんにお傳へして悅んで戴くよ、K上等兵殿、ではなかつたK伍長殿の靈よ、其の他諸戰友の靈よ、これから我々の銃後戰士としての行動を、聢り見守つでゐて呉れ給へ、我々の心から離れないでゐて呉れ給へ――默念、默禱――。それからみんな能く見て呉れ給へ――今日我々が歸還上陸してから、觀る銃後に於ける緊張のしかたを、なにか無氣味なものがあるよ、やれ〳〵良かつた、征く時の様な――お祭り歡迎を受けたなら正歟、惡い氣もしなかつたか知らぬが、何か末恐ろしいものを見せつけられたやうに、落膽させられたにちがひない。

さればこそ通信の自由もあるのに誰一人として○○豫定日などを家鄕に知らせたものもない。「荷物を取りませう」などと申出た近親者らしい者も、見なかつたのだ。

やれ〳〵是で助つた。

道に日本國民だ。大いに賢くなつて呉れてゐる、事變の前途にも正しい認識を持つて來てゐる、螺子のかかり方も相當なものであるらしい、これなら何年續かうが必勝疑ひなしだ。

但だ、完全に安心しきつて良いか其處迄は測りかねるが、大體先づ安心と云ふ所で

あらうか？――。これからは自分達の責任だ――。

――それにしてももう今頃は冗談にも「支那と本氣になつて戰さをして採算がとれますか？」などと云ふ奇問を發する手合ひはゐなくなつてゐるであらうから嬉しい。

併し國民は、一歸還軍人にしてこんな氣の利いた風な事柄を、如何にも一人前らしく、ぼやきながら還つたと聞いたら――茫莫幾百里、朔北の野に、敵軍相手の幾年間而も、悾忽たる陣中の生活では視野も狹まれよう、無理もない、それとも軍人の稚氣か、いや、はやりをの心なき客氣より出でた青臭い仙氣か――底いに嘲ひ消すであらう、結構大いにわらつて戴かう、心中何の疚しさも無い、愧づる所もない、前線より還つて來る軍人の一樣に拂ふ眞實、眞劍な關心事ではないか、進んで一般國民に識つて置いてもらわねばならぬ重大な事柄だ――。

★

――遮莫、戰爭行爲ほど偉大なるものがまたとあらう乎。

一國の存亡興隆が常に、戰爭に由て決せられてゐることは古今東西の歷史に明かで茲に繰返すまでもないが、克くも事變前の日本人から、今日の日本國民に錬り上げて呉れ、覺醒させてくれたものだ、戰爭は確かに最後に物を與へるばかりではない、先づ眼に見ることの出來ない貴い心の糧を人間に與へる偉大なる指導力と、教化力の有ち主である――。

私は乘車以來、ひそかに斯樣な回想や、言はば愚痴に似た問題を自問自答して見たり、或は果しない感慨に耽つたり、しばし盡くる所を知らなかつた。

はつと、我にかへつて見ると、何時の間にか車内は點燈されてゐた、不思議にも皆打合せてでもゐたかのやうにその頃から、顏も、口も快活に綻び始めてゐた、誰の顏を見ても――先づ一と安心、さあ是から國内戰の陣頭指揮官だ、やるぞつ、頑張るぞつ、と云つたげな逞しい、熱し切つた面魂である――。

その時私の隣席にゐたY少尉が、誰に語るともなく云つた。

「今日の上陸は晝で、混雜もなく良かつたが今夜、夜中に著くのでは部隊は迷惑するだらうなあ。」

と、又後ろの方から鸚鵡返しに、

「大丈夫。」

と怒鳴つたものがあつた、例の〇中尉である、今度はまたいやに落着き拂つて、

「と云ふのはだね君、今日我々は歸還第一歩にしてだ、〇〇の稅關吏氏に意外なお褒めの言葉を貰つただらう、萬事あの快適調ですら〳〵つと取運びますよ。」

に又、どつと爆笑が湧き上つた——是歸還上陸後、第三回目の戰場笑ひで野戰の匂(にほ)ひもまだまだ消へうせてはゐなかつた——。

列車は笑ひを乘せたまま、無心一路、西へ走り續けた。

★

——それから間もなく、昭和十六年十二月八日と云ふ世紀的の日が來て、大東亞戰の幕は切つて落され、國民の血を彌が上にも沸騰させ、齒を喰ひしばらせて行つた。

今にして思へば、正に「あのころは？」と、忘れざるべく備へた、想ひ出の記錄となつたのである。而も又不肖の身を以て尙今日、是の曠古の大戰に參加し、微忠の誠を捧げ得る私の光榮と悅びは譬ふるにものなく、表現すべき術を知らない。

二

防空斷想

―まへがき―

敵の我が本土空襲は必至である。此の事に就ては敢へて論議の餘地はない、併し人に依つては觀方、考へ方が千差萬別で、これは直に國土防衛上に重大なる關係を持つ。毫厘のくるひもなく我が判斷が實際の敵情に一致し、また軍民防衛當局の企圖方針及要求に、滿足を與ふる程の防衛戰鬪態勢が完整され、最早微塵も遺憾の點が絶無だと云ふのならば文字通り鐵壁であるが、なか〳〵そうは行かない。而も此の問題たるや大東亞戰爭の勝敗、皇國の運命を決する問題であり、國民としては自已の生活も生命も放棄して稽ふべき極めて重大なる問題であるが、果して防空諸態勢に現はれた實績內容はどうであらうか？

斯うした見地から、大戰第二年目の春以來わたしの特に見て來た、某地方の防空を、いはゆる斷想的記述で國民に愬へんとするものである。

――誤解があつてはならぬから、ことはつておくが、わたしは軍人ではあるけれども、此の方面の責任者でもなければ權威者では勿論ない。また軍人としての立場に於て書いたのでもない。唯、自分の周圍や近邊に起きた事實や、所見を中心として、全く一般市井人としての立場に於て書いたのであることを――。

國土防衛、特に防空に對しては、軍官民一體となつて、各種の施設に、訓練に絶大の努力が拂はれて來た、その普及進歩の迹も、洵に目醒ましく力强いものがある。殊に昭和十七年四月十八日、小癪にも、米機來襲のことがあつて以來、一段の拍車がかけられ、更に强化の著しいものがあつた。そうして、村よりも町、町よりも市、市よりも大都市、就中工業都市が一層徹底强化されてきたのも、當然であらう。

飜つて、過去を考へて見ると、演習の爲の演習と云つた樣な、あのお祭騷ぎに似た、所謂防空演習があつた。正に隔世の感なき能はずではないか。要するに、熱心懇切な、當局の指導によることは、もとよりであるが、徹透徹尾勝拔かうとする、烈々たる必勝の信念に、燃へ切つた下國民の、血のにじむ樣な努力の結晶であつて、言ひ知れぬ力强さと、感激を覺へしむるものがある。

——が、果して、もうこれで良いか、滿足して宜しいかとなると、これは少々問題になつて來る——。物事には最限がない、或る程度の所で思ひ切る、打ち切ると云ふ事も、あるにはあるが、そう、單純には片付けられない。なんとしても防空は、來らざるを恃まず、待つある——我れに備へある——を恃むと云ふ、必勝不敗の鐵壁態勢でなくてはならぬ。安心だ、備へ有れば患ひなしだ。よしやそれが行過ぎの、無駄に終つたからとて、無防備で叩き潰される悲慘事を想へば、決して無駄ではあり得ない。

事苟も、帝國の安危にかかる問題である、必要以外だの、無駄のと云つてゐられる事柄ではない。

今ここ

わたしは三年前北支に於ける陣中であつた、或る日兵室を巡察してゐると、折り疊んだ毛布の上に讀み古した講談ものらしい一冊の本があつた。多分慰問袋の中に入つて來たものであつたらう。見るともなくめくつて讀むと、武士の心がけといふ題目で、伊豫松山藩、久松侯の家臣波賀清太夫と云ふ硬骨武士の事跡が書いてあつた。詳しい記憶はないが、凡そ元祿の泰平に狃れきつた一般武士とは、相當距離のある、俗に謂はれる「かたぞう」であつたらしい。藩でも至つて身分は低いのであるが、人を見かけると身分の高下だとか、老幼の區別もない「すは、今ここ」といふおたしなみに、ぬかりはござらんかなつ——と、聲をかけて挨拶するのがくせで——「今ここ」——といふ異名で通つてゐたほどの武士である。從つて資性清廉潔白また、剛氣不屈、行住坐臥を通じ有事に備ふると云ふ武士の心懸けに於ては、文武の道はもとより、一家一身を持するにも常に秋霜烈日の如く勵精謹嚴で、兎も角元祿の武士には稀れに見る周到な、用意深い人物であつたらしい。

この波賀清太夫が、偶々江戸詰でゐた頃、例の淺野浪士の吉良邸の討入りがあつた、翌朝これを聞き知つて、——これはきつと藩邸にも或る用件が起るぞ——と、早くも判斷した彼れは、江戸詰家老某を訪れ、——御用意はよろしいか——と切り出した。江戸邸まで鳴り響いてゐる波賀の平素を知る老臣は、何をまた「今ここ」奴が、いら

ざる仙氣をやむか、ことは浪人者と、吉良家の出來事ではないかと、言はば嘲笑じみた罵言まで浴びせられて歸つて行つた。それでも恬淡寡慾、ものにこだはらぬ彼れは、歸つてから遽かに邸の内外を掃除させ、靜かに自宅に籠つて何事をか、思案する樣子であつた。

それから數刻の後であつた。突如老中より浪士大石主税以下十名を、松山藩邸に御預けとなつた、早々引き取れとの旨が達せられた、いや驚いたのは家老某であつた。全然豫期せなかつた事で、何をどうしてよいかすつかりあがつて終つて、處置なしといふ態であつた。斯うなると地位も、面目もあつたものではなくなつた。早速波賀の邸へ駈けつけ平身低頭、その指圖を受けるより外に手はなかつたのである。波賀は心よく諾を與へ乘出した。遉がに「今ここ」の異名ある波賀だけあつた。警固の人馬、駕籠の用意、身柄受取りの應對から經路、道中の警戒配置、配宿人別割、給養から水も漏さぬ周到な指圖で、而も仙石邸からの引き取りは松山藩が、一番早く正々堂々たるものであつたとの事である。

更に波賀は、翌元祿十六年二月四日、義士一同切腹の際大石主税と、千葉三郎兵衞との介錯までつとめ、立派な腕を示したとのことで平生の用意と心懸けのとうとさを遺憾なく發揮し、一躍五十石の加增といふ耀かしい出世物語りであつた。

——たかが、一武士の私行物語りであり、多少修飾もされてゐると思ふが、人として平素の心懸けと、用意を懈ちず、物事に備へるといふ、周到なる事前準備の大切な事を充分に敎へてゐる。縱へ清太夫の場合、赤穗義士の問題が生起せなかつたにもせよ、これだけの嗜みある以上、何時かはその眞價が發揮され、藩公にも認めらるる時期があつたであらうから、決して無駄な「今ここ」に終つた筈はない——。

況んや、防空に於てをやである。戰ふ日本國民に「すは、今ここ」の心懸けと、準備とは、勝つために緊要不可缺の要素でなくてはならぬ。

——必至空襲——

空襲は、必至であると云はれてゐる。云はれてゐるのではない事實と云つて良いの

である。かるが故にこそ、今日の必勝態勢が整へられて來たのである。

併し國民の中に、ほんの一部ではあるが、――防空態勢の完璧を期せしめんが爲に謂ふ言葉であるとか、或は近代戰爭の生んだ流行語の一つであるとか、或は又そう云つて備へて置く必要はあるが正歟、來はせぬであらうとか――、意外な樂天論者もある。

而も、國民中の僅か一部と書いたが、意外にも有識者の中にもそんな淺薄な考へを持つてゐる人が、絶無でもないらしいのであるから愈々以て危險千萬である。勿論斯う云ふ人物は、多くある筈はないが、兎に角有識者と云つても獨善的に有識振つてゐる、自稱有識者であつて、實識を備ふる眞の有識者はあり得ないのに不思議はない。ところが、斯うした人々も防空施設もし、訓練にも出る。時には指導にも任じてゐることがある。併し熱はない、義務的であり、消極的であるから、頼みがたいものがある。

總じて、これ等の人の論據を詮索して見ると、大體云ふ事はきまつてゐる。曰く、

なるほど米機も一度やつては來たが、結果は概して世界の物嗤ひ的なもので終つた。此の上反復日本本土を空襲すべく企圖し、太平洋を横斷するにしても、北方から來るにしても、南太平洋方面から來るにしても、支那大陸から來るにしても、容易な事ではない。來るには來ても大なる戰果を收め、脅威を與へることは出來ないから輕々にはやつてこまい。今一つは飛行機の進歩も目醒しいものがあるにはあるが、現在に於ける航續力と、補給や、天候氣象の關係等を考へると、來そうで來られぬのが敵機だ、と云つてゐる。

まことに、さつぱりした吸物を食ふ日本人らしい考へ方で、あいた口がふさがらぬ程の空虚なものである。

一體國運を賭して戰ふ、近代戰といふものを、こんなにあつさりした考へ方で、敵情を判斷し、見くびつて良いものであらうか。思はざるも亦甚しいと云はねばならぬ。

飛行機の性能にしても、製作技術の進歩だとか、熟練工の養成だとか、生産能力の增强狀態だとか、飛行士の養成問題だとか、全然敵側の裏面に於ける戰爭指導の實相

とか、實力といふものを正視どころか、全く考慮に入れてゐない、最危險なる觀方である。

一國の科學智識、技能、思想、生産力、經濟力、人力等凡有力を動員統合して戰ふのが、近代戰爭の樣相である以上、如何なる飛行機が飛び出すか圖り知れるものではない。我れもそうであるが、敵方はより更に創意と、努力を凝らしてゐることは必定である。

例へば、彼のヘルツが電波を發見したとき、やがて電線のない電話が出來ませう——と或る人が祝辭を述べたに對し、ヘルツ自身が電磁波の振動數と、音波の振動數との隔絶した開きを指摘して、出來る筈がないと確信に滿ちた、答をした——。それから僅か十年にして、マルコニーは、ドーバー海峽を距てた無線通信に成功したのだそうである。こんな事よりも、もつと現實な、飛行機技術の長足振りを見渉してもである、人間が空中を飛ぶといふ驚異的な發見から、今日飛行機に乘る事が、日和下駄の散歩氣分にまで、進んできた發達過程と、期間を見ると決して塵埃(ほこり)のたまるほど、古い歴史ではないのであつて、何も現在に於ける中間的現狀報告にも及ぶまい。

曾つて、兵器關係の發明者達に對する表彰式が行はれた、其の席上で佐藤軍務局長は、「我が方は、日ならず米本土に對し實力を以て攻擊を實行する」といふ意味のことを語つた、決して米國民に對する、こけおどしの空言ではない。確乎たる成算と、確信を持つての言だと、信じてゐる。敵も亦、必ずしも天文學數字とか云つて一種の法螺かのやうにも、扱はれてゐるが單なる量的生産にのみ狂奔してゐるのでは絶對にない。優秀なる超性能を備ふる、飛行機、艦艇、火砲等の發明、製作技術の向上に血まなこになつて、努力してゐることは、表面に現はれた新聞情報に依つても明かであるし、又決してそれが出來ない國でもない事を皆承知のはづである。從つて今日の新鋭機、必ずしも明日の新鋭機であるはづは無い。正に時進日歩の狀態である。

よしや米西海岸から一氣に日本に來て、爆擊の上悠々歸つて行く樣な、優秀機がなかつたにしても、敵にしてやらうといふ決心がつき、之に基く一般作戰上の準備が整へられたならば、難しい問題ではない、事實昨年四月十八日はやつて來た、小手調べ

が終つてゐる。洋上には飛び石的な役目をする島嶼もある。航母も相當に保有してゐる。或は爆彈を一〇噸積む所を五噸に減らしたならば、それだけガソリンが積めるから航續距離を延ばし得る。爆彈の減載を補ふには機數を增せば、爆擊力を減ずる事もない。

尙、笑止なのは天候氣象に對する認識の乏しさである。春の頃、警戒警報が發せられて、恰度、花時の數日間が續いた。そうすると、斯う雨が降つたり、曇天が續いては、敵機も來はせぬ。來そうもない狀況下にぢり〳〵續けられては、却つて氣勢がたるみ、眞實の狀況下に於て充分に戰鬪威力が發揮されぬかも知れぬから、もうそろ〳〵解除してもよさそうなものだ。といふ樣な口吻を漏らす者もあつた。愚かといふか、無氣力といふか隨分わからぬ人間もあるものだと云ふ感じがした。無關心、無氣力もここまで來ると、泣き笑ひものである。

日本にも亦、天候的飛行障碍日はある。が概して日本といふ國が、晴々した天候に惠まれてゐる——日本晴れと云ふ言葉さへある——國であることぐらいは、世界人の誰もが認識してゐるであらう。しかも、風雨にしろ、雲霧にしろ地球上全面的の現象ではない、宇宙と云ふ大きな面から見れば、極めて微々たる部分　齎らされる自然界の落し物でしかない。況してや日本に於ける現在地が猛烈な風雨であつたからとて、敵の方も荒れ狂つてゐるとは云へないくらいは、兒供でも知つてゐる。それにだ、眼と鼻の關係にある、妻女山の謙信と、川中島の信玄とが前日來睨み合つてゐたのとは、地域の廣さに於て、土臺的に問題にならぬ相違がある。また旅客機ならば途中から引き返すといふ事もあるが、我が沿岸近く接近する敵機が、日本の地上や、上空が少々荒れてゐたからとて、積んで來た爆彈を土產物のやうに持つて歸る筈は金輪際ない。のるか、そるか命を懸けて天候障碍ぐらいは押切つて決行するのであるから、これも考慮に入れねばならぬ。

兎も角、日本の天候氣象に就ては、瞭きりした統計的數字を擧ぐることは許されないが、大體に於て四六時中、敵のために條件が良く、我れのためには不利であるといふことを認識して置いて、不斷の警戒を怠つてはならないのである。

般鑑遠からず、我國から飛行機による渡洋旅行や、國際空港に於ける歡送迎に、經驗を有つ人達ちは知つてゐるはづである。濃霧は低く垂れ、剩さへ若干の風と雨もあり、滑走路に滑り出たばかりでさへ、乘客の顏も飛行機の姿も、さざかに見へぬ樣な、はら〳〵させる惡天候の日でも、悠々飛び出して行く。程なく無事目的地に着いたといふ知せを受けるあの事實を——況してや、煤煙に煙るのを常とする工業都市にゐるものが、こちらが惡天候だから、敵機は來まいといふ判斷——尤も公算的には率も低いであらが——で、警戒を懈怠すると云ふ樣な事があつたならば、これだけ危險千萬なことはないであらう。

そこで、敵機の來られる事はこれで大體明かになつたが、次ぎに考ふべき事柄は、敵に日本本土爆擊を決行する企圖を有するや、有せざるやの問題である。

今更、今さらである。然樣なことを論ずるのは聊か野暮に屬するのであるが、一應檢討して見やう——。

我れ〳〵はルーズヴェルトが「東京進攻路は幾條もある。其の進攻路の何れをも採るであらう」とか、或は「日本攻擊のためには、その作戰の發起を大洋上より行ふか、大陸沿岸より行ふかは近き將來實現の上に於て知り得るであらう」とか、更にまた「ビルマ援蔣ルートは遮斷せられたが、抗戰六年の苦鬪にも尙屈せず聯合國と共に、その共同目標たる自由獲得戰のため、死を賭して戰ひつゝある重慶の功績と、中國大陸の戰略的價値とは斷じて見逃し得ぬ」とか、或はスチムソンが自國民を警めて曰く「本年度中に、東洋の或る地域に於て國民の豫想せざる大規模の作戰が行はれ、多數の犧牲者を出だすであらうことを覺悟せねばならぬ」とか、其の他之等に類する、敵主腦者の言明とか、發表だとか、放送であるとか隨分聞かされてゐる。

併し我々は、こんな表面に現はれた敵側の宣傳的言動にのみ據つて、敵情を判斷し警戒をしたり、びく〳〵したりしてゐるのではない。——もとより參考にはなる——。大東亞戰爭を指導する我が軍部最高統率部の、敵情判斷が如何なる、根據に基くものであるか。又如何なる資料に依つたのか知る由もないが、恐らく軍部に至つては、なほ更の事、こんな謀略的、宣傳的言辭を取上げて有力なる、敵情判斷の資料にしたと

は思へない。しかしなんぼデマづくしにしても、語つて理におちるといふ事もあるし、千萬言の中にはそこはかの實も見出し得るから參考資料たるにはちがひない。

然らば、何を根據とし、何に基いて敵の企圖を判斷するかである。餅は餅屋で、直接戰爭指導者に委せておいて、よいのであるが、苟くも戰ふ日本國民である以上、その一人々々が、ここまで關心を拂ひ熱を以て、考へて見なくてはなるまい。これが日本國民たるの、忠誠であり、大戰を勝ち拔く爲の責任でもある。そこで判斷の下し方であるが、結局は敵側の肚の中に喰ひ入つて、眞底から敵の立場になり切つて觀察を下して見る事である。ところで、今日我れ〳〵が、敵米の本當の內面心理を解剖し、姿を見極めようとしても多くの國民——と云つては失敬な云ひ方であるが——は、資料としては近世に於ける日米關係の、極めて平凡な、常識的見聞と、それも大東亞戰爭後のものが大部分ではあるまいか。唯それだけのものしか持合はさないと云つて過言でなからう、がそれだけでも結構である、而も專門家にあらざるものが、必ずしも軍事專門家のやうに、戰略とか、戰術とかの定式に强いてこだはる必要はないから私念、雜念を全く取り去つて白紙の樣な、所謂神の立場になり切つて、常識で行くが宜しい。所詮戰略、戰術も常識以外の何ものでもないからである。

そうして先づ、自己をすつかり敵米の立場に置いて——これが敵情を判斷する上の原則でもある——日本に對し如何に出るべきかを、過去、現在、將來に亘つて審かに思考して見ることだ。そこには必ず、米として如何にするかと云ふ、決心——肚——が決る、決心が湧き決定すれば、處置——如何にするかと云ふ方法なり、手段——が生れて來るはづである。

こんなぐあいにして、推理判斷を下して生れて來た、答へを今茲にわたしが平明直截に書いて見ると、次の樣なものになつて來る。

——もとより、考へ方、觀方はいくらもあるが、勉めて小難しい歷史的な古事因緣や、術語を避けて、最も通俗平明に而も、飽くまで常人としての常識に愬へて考へたものである——。

過去百年に近い年月に亘つて、取つて來た東洋に對する侵略政策は、その中でも日

露戰爭更に、滿洲事變、就中支那事變に於ける日本に對する米の、出方は米――自分の方――の非望であり、暴擧であつたかも知れないから、先づ棚に上げて措くとして、忘れられぬのは、一昨年十二月七日眞珠灣に於ける出來事以降の狀況である。小癪で、なまいきで、全るで赤兒に叩かれたか、躄に蹴られたやうな、腹立たしさである。眞珠灣の慘敗は、こちらも不用意であつた。否不用意ではなかつたのであるが、甘く見過ぎたのと、敵の手法を知らなかつたからである。これも自分の方の、不覺であつたからこれも先づ棚に上げておくとしてだ、それ以後といふものが連戰連敗で、痛い目に合はされ通しである。これが始めから赤兒の米であり、向ふが金剛力士の日本であるならば、所謂赤兒が手をねじ上げられたのと同樣であるから、所詮及びもないものとして、諦めもするが決して赤兒の米ではない。此の事は世界中に知れきつた事實である。（註＝此の强いといふ自惚れと、事實？　を、繰返しくりかへし、反省して見るであらう）

どう考へても、無念でやる瀨がない。諦めきれない。而もそれが、無念だとか、腹立たしいとか云ふ樣な、生やさしい單なる感情上の問題ではなくなつて來た。それは自國永遠の生命力に與かつて力ある唯一つの寶庫でもあつた西南太平洋上の生命線とも謂ふべき、出店が片つ端しから取上げられて終つたのである。しかのみならず、日本は、憎むべき彼の獨、伊と固く結び樞軸國として其の陣頭に立ち、事每に米英に對抗し、又其の實力侮るべからざるものがあり、最早父祖以來の東洋政策どころではなく、自民族の死活を制する事態に追ひ詰められつゝある。一方には又、たのむ聯合國陣營も、表面の一連托生は一應姿を備へてはゐるが、今はかくしきれぬ不安が生じつつある。而も自ら生きる事に吸々として、漸く疲れを見せて來た老英は、今や恃むに足らず、旗色の赤さは目立つが、右するか、左するか容易に本性を現はさぬ、謎のソ聯また求めて賴り得ず、更に重慶に至つては廣大なる土地、資源といふやうな好餌は持つてゐるが、其の他に至つては宛然、あしなへの老人か子供の手を取つてのみちゆきと、同樣で剩つさへ宋美齡と稱する牝鷄を寄こして、めそ〳〵と泣き續けであるし手足まといでしかない。其の他歐亞方面に於ても固より取るに足るものなく、斯うな

つて來ると米としては、他を賴ると云ふことよりも、先づ自分に依つて事を決せなければならない狀態になつて來た。そこで仇敵としては日・獨・伊とあるが、先づ以て日、獨を料理しない事には勝利も、自存もあつたものではない。偖て日、獨と相手は決つて見ても同時に、叩き潰すには少々手ごたへがあり過ぎる、幸ひ獨、伊に對しては自國のほかに、英、ソ其の他歐亞に於ける反樞軸諸國が、共同戰線を張り直接當つてゐるし、何は兎もあれ米當面の敵は日本でなくてはならぬ。先づこの憎むべき强敵日本を、かたづけることが米として取るべき道である。（この問題は、前から聯合國側全體として論議された所であるが、これに對する米の出かたと云ひし、又歐亞方面に於ける、米軍の案外消極的である行動と云ひし此の間の關係を暗に、裏書してゐるものが尠くない）として、主目標を日本に向けてゐる。卽ち日本をこつぴどく叩きのめして降伏させねばならぬと云ふので、斷乎日本攻擊の「決心」が疾うから決つてゐて、而もこの決心は戰爭の長期化と共に、擧國的に彌々熾烈鞏固を加へ、到底變化するなどの事は考へられない。

偖て、斯く決心がついた以上、これをどう云ふ方法で實行するか「處置」――手段――の問題になつて來る。そこで現在までに於て、日本軍より占領された北はアリューシャンより南方諸島の日本軍に對し猛烈なる反擊を加へ之を擊滅し、各失陷島嶼を奪回するのも一案であるが、日本が現在の如く島民を歸伏（？）せしめ、鐵桶の防備陣を形成するに至つては、最早それは無謀に近き擧であり、尨大なる戰力の分散消耗でしかない、良しや出先きの日本軍を擊滅し、各要點、水域を奪回したからとて、日本國民がそれで降伏するとは思はれない、特に日本國民に於て――である。またそれを以て、米國と、日本の關係が拔本塞源的に、解消されるやうな單純なものではなくなつて來てゐる、なんとしても反樞軸陣營ならぬ、米國自存のために、日本そのものを叩きつけてやらねばならぬ、要するのに、戰爭の最後の決を與ふるものは、敵に攻擊、肉迫して止めを刺すにある。之を實行せねばならぬが、さりとて太平洋を隔てた日本々國に、優勢なる兵力を送つて一氣に揉み潰すといふ樣な事も一寸望まれ難い、果して然らば處置なし乎。いやある、大いにある。

――近代戰の華と謂はれる、空軍兵力に物を言はせる事である――。

而も日本のそれよりも、遙かに優勢なる空軍を以て日本本土の心臟部を猛爆し、軍、政其の他の中樞指揮機關を木葉微塵に擊摧し、同時に、國民に對し深刻甚大なる損害を與へ、以て國民の戰意を喪失拋棄せしむるに在る。

然らば、其の進路を何れに取るか、これは少々問題であるが、さりとてどれも、これも不可能といふのではない。と云つても固より戰爭行爲である以上相當の困難、障碍、損耗は覺悟してかからねばならぬ。

先づ、太平洋方面からの進攻を考へて見よう。かなりの距離があるし、據り所の少ない渺茫たる洋上のことであるから、飛行機は勿論であるが航母を始め、護衞艦艇から補給手段に、周到なる計畫と充分の準備を以て、かからねばならないから、不可能ではないが相當困難を免れない。

次は、西南太平洋方面よりする空襲であるが、濠洲及其の近海には未だ米の勢力下に屬する島嶼が殘存するし、先づ基地に不足は見られぬであらうが、中間太年洋上に於ける戰略的要點が、日本軍の手中にある關係上日本軍の反擊妨害行動は、相當活潑であることを豫期せねばならぬから、これも全然不可能とはぜぬが、大なる損害を覺悟せねばならぬし、最良の進路とは言へぬ。

自國本土より、比較的近距離にある。アラスカ方面よりする進擊は、前々から考慮してゐた所であるが、アリューシャン列島の一角を、日本軍に占領された今日に於ては、西南太平洋と同樣日本軍の妨害攻擊を受くることを考慮せねばならぬ。第一本國中樞部より遙かに距たるを以て、輔給輸送其の他容易ならず、先づ西南太平洋方面に尋ぐ、困難を覺悟せねばなるまい。

次に、基地の獲得さへ可能となれば、距離其の他に於て最適とするのはシベリヤ沿岸である。そこで曩にソ聯に對し交渉したるも、彼れは日本方面への刺戟を考慮してか、米に即諾を與へず作戰上急速なる目的は達し得ざるも、留保期間を附しあり、故に全然見込みなきにあらず、多分に米に取りては希望ある問題として殘されあり、爾後に於ける交渉經過等に關しては、米國自身として多くを語るべきでなからう。（註

日本としては相當に注意を要する問題と云ふべきである）

なほ殘されてゐる方面に、支那大陸がある。敍上の四方面も相當の困難は伴ふとして、充分實現性のある事は認めぬ理けにゆかぬ。併しこれに比較すれば、支那大陸は餘程、容易であると云へる條件を備へてゐる。と云ふのはなるほど重慶には、自ら戰ひ拔く戰力の點に於ては充分でない。又これを援助しやうにも補給路の殆どが日本軍の爲遮斷せられ、空輸に依る外は絶望に等しい狀態である。だから、前にも述べた樣に大なる期待をかけられぬ同志國ではあるが、然し聯合國の一陣營を以て自ら任じ過去六年間の抗戰に依つて、比較的豊富なる人的資源と、就中戰はんとる抗戰意義に至つては最早試驗濟であるし、或る意味に於ては、米國民に取つては寧ろ、英にも優る有力なる盟友國たるを失はぬ、特に日本々土攻擊のためには戰略的に、極めて重要且有利なる據點、と云はんよりは資源的に有望廣大なる土地を有し更に、直接作戰に必要なる飛行基地も略、必要とする程度のものを既に確保しある點を見逃し得ぬ。故に今は只、將來直接戰鬪を指導する爲の人員と兵器とをさへ供給すれば、飽くまで共同戰線の名に於て彼れを利用しつつ戰爭を主宰指導し得る。而も蔣介石――重慶――を利用する點に於ては、先づ兵力の損耗に於て然り、なほ飛行機其の他の主要戰鬪兵器を除く、以外の物に於ても亦然り、茲に於て日本々土空襲作戰に要する、負擔戰力の幾割かを輕減し、所謂「重慶を以て日本を制する」と云ふ。米には持つて來いの好條件が眼前にある。併し此の問題は米國が重慶を利用すると云ふよりも、重慶の抗戰力の低下に反比例し米空軍の强化は、已に支那大陸の敵が米國軍に變貌しつつあるかの樣な狀況にある事を何人も感ずるであらう。とまれ唯茲に、輸送補給といふ相當困難な問題が横たはつてゐるが、現在米の保有する空軍力から見れば敢へて困難とするに足らない、充分の成算がある。

茲まで肚が決つて來ると、なるほどル大統領の云ふが如く、東京進攻路は慥かに數條ある。その數條の進攻路中、先づ支那大陸を基地とする日本々土空襲案が、最も有效且適切なる最良案なりとの「判斷」が下される。

最後に殘る問題は、作戰實施時期の問題であるか、開戰以來米が全力を擧げ急ぎつ

つある。飛行機製作技術の劃期的研究向上、生産の增强、飛行士の養成、空軍の改編等、着々實行し、日を經るに從ひ益々充實强化されつつある――謂ふが如く、悉くが紙上計畫、天文學的數字ではないのである――から。

ただ、敵日本々土の防空態勢に於て、

乘ずべき　虛、

衝くべき　間隙、

を見出したならば、隨時、機を失せず、果敢なる日本空襲を、決行するに躊躇しないであらう。

殊に、支那大陸方面に於ける、空襲準備態勢が逐次整備强化されたる、現在に於て、特に然り。

――以上が、わたしの敵米自身の立場になつて考察して見た。「敵情判斷」である――。

これによると米が「强大なる空軍兵力」に依つて、我が心臟部に肉迫せんことを企圖し、而もその進攻路は大陸の一方面とは限らない、いやしくも必要、可能とする要點基地には、各々有力なる空軍を配置し、空軍による戰略的包圍態勢を形成し、乘ずべき間隙、衝くべき弱點に對し虎視耽々、飽くまでも空軍兵力に、物を言はせんとする、敵米の腹中は充分に讀み取られるであらう。

茲まで、敵の企圖が明瞭になつてくれば、最早此の上理由の說明でもあるまい。しかし讀者も、理由の一つとして次の事を一應、考へて戴きたい。

――我れに、大東亞共榮圈の完成、世界新秩序の建設といふ、世界人類最高の道義に、立脚したる儼然たる大目標を有し、是を達成せんには、米英擊滅の只一途あるのみである。反對に敵米英鬼からは、今更我れに對し好感を以て、ひれ伏して來ることは絕對望み難い。之を屈し來たらするものは唯、皇威の威力の前にのみであることを――。

そこで敵米の、日本攻擊の肚が決り、方法も空軍によることが瞭きりして來た。其の進攻路も大體支那大陸から、やつて來るであらうと云ふ事に落ち着いてきた。併し

重ねて云ふが、この進攻路が絶對的のものと盲斷してはならない。理論上の公算が大であると云ふのである。アリューシャン方面にせよ、太平洋方面にせよ油斷は禁物である。又シベリヤ方面にしても然うである。基地借用問題の如きも、事態は解消か、進展か同じ穴の狸同志のやる事であるから、安心はならぬ。

とまれ、米に取つては、その何れの方面も「絶對不可能の進路」ではないのである。其の悉くが、强大なる空軍による包圍陣形の各一環であることに、深甚なる關心と警戒を要する。

かるが故に、我が方の防空態勢は所謂「八方睨み」でなければならぬ。

わたしは、國民に叫ぶ。

——空襲は、必至であることを、而して其の時期は、米英鬼を完全に叩きのめすまでの、全期間を通して。で、あることを——。

―備ふる威力―

——敵機は、今に來襲するといふが、來ないではないか——、と、怪訝そうに語る人がある。

來ないでこそ、幸ひ若し來たならばそれこそ、多かれ、少なかれ若干の被害は、免れないのだと答へてやりたい。併しよく考へて見ると、斯うした質問？　に對しては、こんな稚兒論法だけでは、放つて置けない。なにか、防空だとか、訓練だとか云ふものを煩はしいものの樣に考へた一種の愚痴か、つぶやきのやうにも聞へるから、敢へて一言するのである。

わたしは、恰度滿洲事變の起る以前——なんとなく、彼我の空氣が感じに現はれてゐた頃である——或る國境の守備に任じてゐた。小さい部隊の事ではあるし、敎練、演習と云つても同じ事を繰返す事も多いしまた、行軍の如きも守備隊の事で、遠い地域には離れられず、時には無量を感ずる事もあつた。それでも喇叭手は朝夕の號音を

勇しく吹奏し、其の他部隊の威容も嚴肅にし、如何にも日本軍の守備隊らしく儼然と、構へてゐた。

僅か江水を隔てた、對岸の支那側では時々銃聲を聞いたり、犬や人馬の騷ぎを聞いたり、なんとなく落着かぬものがあつたが、我が守備隊に對しては何等敵對行動に出づることもないし、警備地の治安も極めて、靜謐なものであつた。或る時は、こんなに平和が續くのなら、何も此の邊境に軍隊を置く必要はないではないか。母隊に集結して、どん〳〵猛訓練でもやつて呉れた方が、どれだけ良いか知れない。と、熟々考へて見たりした。

だが、待てよ、我が守備隊が撤收されたらどうなるであらう。それこそ對岸の支那軍隊は默つてゐまい。必ずや何等かの行動を取るに違ひない。たとへ堂々と我が國境を侵犯せぬまでも、國境在住民の上に何かの危險が、迫つて來るに相違ない。

そうなると、小部隊とはいへ、我が守備隊たるもの、なか〳〵どうして容易ならぬ重大使命を果しつつあるのであつて、地味な、縁の下の力持ちの樣な、苦しい見榮へのない勤務ではあるが、充分に日本軍としての晄みを利かせ、皇威を發揚してゐるといふ任務の尊さを悟り、それからといふものは勤務上の總てに實が入つて來るし、愉快にもなつた。

敵機は來ないと云ふけれど、支那大陸に我が派遣軍がゐなくて、あの活潑なる作戰が行はれず、特に我が陸鷲部隊が、積極果敢に、敵基地に對する爆擊をやらないでゐたならば、どうであらう。また我が國内の防空陣が、全然なつて居らず、國民も亦精神的に緊張して居らず、箍をゆるめてゐたならばどうか?、疾うのむかしに來襲したのではなからうか。

須く、國民は自ら備ふる力を知らねばならぬ。空襲必至の情況に於ては、眼前に來らざることは絶對に來ないといふ保證にはならぬ。現實に一回でも來たら、それこそ百年目ではないか、來らざる前に備ふる事こそ兵法の要諦であり、防空必勝の要訣でもある。備へて置いて無駄はない。

また或る者は、四、一八の米機來襲を評して曰く「いよ〳〵夷狄に、皇土を侵させ

たか」と、悲憤慷慨した熱血の士もあつた。其の意氣たるや洵に壯とすべきである。

或は又、四、一八の空襲は日本の防空も充分でなかつたから多少の被害を免れなかつたが、今度は民防空にせよ相當に強化されて來たし、軍防空に於てもあの頃とは格段の違ひであるから、軍は面目にかけても一機だに、寄せつけることはあるまいとか、かなり行過ぎた安心感を抱いてゐる向きもあるやに見たが、其の何れも防空に對する認識の不足に因るものと言はねばならぬ。

――先づ、大空、青天井とも云ふが、空中といふものの本質から考へて見らねばならぬ――。

これだけ據り所のない、またはてしのない無際限なものはないのである。如何に科學が發達し、人智が進み、强力なる防空施設がしかれても、この大空に對しては、壁も、蓋も出來られそうでない。

防空設備に於ては、殊と完璧に近いと云はれるロンドンも、獨の空襲の前には如何ともし難い狀態であることは、何人もよく知つてゐる事實である。獨の優勢なる空襲威力も計算に入れて考へねばならぬが、事由の中心は、制限をしやうにも、飛行機を以てする空中戰か、地上より銃砲火を以てする妨害のほかは殆ど術はない。これとても無際限の、空中といふものから見れば、太平洋に投網を一つ投げ込んだのと大きな違ひはない。結局取止めのない空中なるが故である。

然らば、どうせ侵入する敵機ならば、何もこれほど力瘤を入れ、汗みどろになつて防空々々と騒ぐことは、徒勞かの樣にもあるが、そうはゆかない。

防空の目的は、理想としては敵機を一機だに、我が上空に寄せつけない事にあるが、これは、前敍のやうに空をやつて來るしろもので、先づ現在の人智、科學の力では、絶對とはゆき難い。そこで及ばぬまでも、あらん限りの防空施設と、防空戰鬪に依つて、極力敵機を擊退し、なほ侵入したる敵機によつて投下される各種の爆彈や、銃擊等に因る損害を、最少限度に極限し、喰ひ止めやうと云ふ事になつて來る。

で、あるから、甚た極端な例ではあるが全く、徒手空拳の無防備で、痩せ我慢をしてゐたと假想して見るが良い。それこそ、敵機の爲すがままに委せるほかはあるまい。

假りに、敵空軍の攻擊力を、一〇點とするならば、これに對する我が方の防空戰力は、一一點以上でなければ、これが封殺必勝は期し得ない。一一點以上への到達は容易ではないが、何んとしても一一點乃至一二點以上の防空戰力を保有せなければならない。

これが、四點とか、六點とか云ふ力量では勝ち得ないばかりか、慘々な目に逢はなくてはならない。六點は、四點の場合より二點だけ、損害を輕減し得るし、八點となれば、またそれだけ局限し得る。一〇點では五分、五分である。如何なる困難があらうとも、一一點以上の必勝力を獲得して置かなければならない。

今や、我々國民は徒らに左顧右眄する秋ではない。備ふる自らの力を信じ、敵空軍の攻擊力を完全に壓倒擊碎するに足る。防空戰力の完璧に、渾身、最善の努力を拂ふべきである。

重ねて言ふ。

——備ふる、自らの力を信じ、孜々として努むる所に、絶對不敗の、必勝防空鐵壁陣が、生れることを——。

況してや、戰ふ現在の日本國民には、實戰の經驗を有つと、もたざるに拘はらず、爆彈は怖しいとか、燒夷彈はこはいとか、いや瓦斯彈はしまつが惡いとか、敵機の銃擊がどうの、と、氣にやむ時代は、疾くに過ぎ去つた。老幼男女を擧げて一人も殘らず「戰さ」をするのである。

彈が降らうが、槍が來やうが、沈着、冷靜、而も機敏に、片つ端から之を處理し、我が損害を極少限に喰ひ止めねばならぬ。

——最早、思案の時期でもない。餘地もない。只、やる事はこれだけであると、結んでおく——。

― 服裝と外出 ―

警報の、解除されたのは土曜日の夕方であつた。何處も櫻が滿開で、陽氣であるし、明日の日曜は何んとかして、花の下に暮したいといふ氣分が、頭に泛んだことは誰し

もで、人情といふものであらう。と、同時に決戰下でもあり而も、空襲必至の情況下である事も、一應は考へて見た筈である。

わたしは、その翌日曜日の八時頃から、公用務を帶びて隣りの或る街に、往復三時間餘の外出をしたが、茲に其の日の所見を記錄して、世の人に愬へたいと思ふ。

やつとこの春、九州から引越して來たわたしは、曾て公私の要務で何回となく、東京往復もしたが、ここにはめつたに下車する機會に惠れず、平年花時に於ける人出が、どうであるか知るよすがも、なかつたのであるが、當日郊外電車の雜踏振りは、相當なものと、云ふよりも正に驚異的なものであつた。

とりわけ目を瞳らせた風景は、他人を押し除けて乘るぐらいは、當りまへだ、と云つた樣な威勢の良さ？　を、公々然と見せつけられた事であつた。中には勢ひよく人を突きのけて、連れのものを乘せて、得意そうにしてゐる青年があつたり、自分だけ慌てて乘り込み、まごついてゐるいたけない娘を、金切り聲で呼び立ててゐる母もある。と云つた調子で、實にどうも、斯う人間が積極勇敢では、頼もしい樣な淺間しいやうな、泣きたくなる樣な感じがしたが、强ちわたしのやうな、田舍者の愚にも、つかぬ仙氣といふものであつたらう歟。もとより自分も、人に揉れながら立ち通しであつたが、側で話す男達ちの話題が頗る耳障りであつた。

――大體、翼壯あたりがだ、卷脚絆を穿けとか、モンペを着ろとか、あれ達ちに何の權利があつて、そんな事を云ふのか言語道斷ではないかねえ君、この間ある橋の入口で、某婦人はモンペの上にコートを羽織つてゐて、翼壯氏に咎められるや、パッとまくり上げて見せてやつたら、グーの音も出なかつたそうだ、君愉快ちやないかね。今度俺等に、そんな文句をつけたら、ウンと逆ねぢを喰はせ、二度と文句を云はぬ樣にしてやるんだが――と。

次から次へと、防空服裝に對する、憤懣らしい話はつきなかつたが、洵に聞き辛らかつた。全るで戰さの相手が、翼壯や、指導當局者へ變つて來たかの感じがした。

警報下に於ける、官民の服裝に就ては、兎角の聲をかなり聞いた。要求する方にも熱心のあまり、行過ぎと云ふ事はあり得るし、事實あつたかも知れぬ、が、その何れ

にしても、防空戰鬪といふものの實相が、如何なるものであるかといふ事を認識してゐないからのことであると、見るの外はない。云ふことが甚だ小さ過ぎる。遺憾ながら戰ふ日本人としての考へに、徹してゐないやうである。

卷脚絆にしても、何百萬といふ人口を擁する大都市の人間が、遽かに買ひ揃へることの困難である事は分り切つてゐる。モンペにしたところで、如何に廢物利用だと、してもおいそれと右から左へは出來兼ねる場合もある。

所詮戰ふ國民としては、平素の心懸け、平常の嗜み、勝ち拔く爲の工夫が肝腎で、それを要求してゐるのである。

平素の、心懸けや準備を懈つてゐたからこそ、慌てねばならぬし注意も受けねばならぬ。又其の局に當る人々をして焦躁させ、口喧ましく言はせる結果に、至らしめたのではあるまいか、これが則ち敵側に乘ぜらるる、隙といふものである。相手は米英だ、然樣な小人、婦女子等の口にするやうな、線の小さいことを眞似てゐるべき秋ではない。

要は、戰さの出來る服裝を考へねばならぬ。問題は防空戰に勝たんとする精神にあると思ふ。

此の春、新國劇が中野實氏に依つて書かれた「香港進擊前」を、三月興業として出した。わたしはめつたに芝居は觀ないのであるが、中野氏自身を始め、俵藤理事や、島田、辰巳等の幹部俳優達の熱誠に動かされて、觀もしたし、宣傳的指導の立場から忌憚のない、批判も加へたのであつたが、其の劇中に或る戰鬪中行衛不明になつた、下士官以下十名の兵達ちが、十日間の後、傷心に疲れ切つてゐる部隊長の許へ、ひよつこり還つて來る場面がある。みんながへと〳〵に疲れ、或る兵は他の者に援けられながら、或兵は足を引き摺るやうにして負傷の苦痛に堪へながら、呼吸も苦しそうに見るも痛ましい姿で歸つて來た。部隊長は慈愛の眼に、涙を泛べながら感慨悲壯なる面持ちで、見上げ見下しするあの場面、あの芝居を觀た人達ちは、あの場合に於ける下士官、兵達ちの服裝を想起すべきである。

雜囊や、水筒は、破れちぎれ、衣服も毀つき或は裂け、泥ん子のやうになつてゐた

服裝を、あれは芝居だからとは、わたしは云ひたくない。幾回となく自ら體驗もし、事實を觀て來たわたしは、あの生々しい眞に逼つた、實感描寫には、戰場に於けるありし日の光景を想ひ出して、泪しながら觀劇したのであつた。あれが、戰さをする者の服裝であり、戰ひをした後の情景である。

嘗て、或る街の講演の後に、空襲を受けたなら爆彈は、さぞやすさまじい音で破裂するらのでありませうなあ、と、云ふ樣な奇問を受けた。で、わたしは、そんな事を氣にやんでゐたのでは戰爭は出來ませんよ。人間もその場にのぞめば、肚もきまる、度胸もすわるし、現にみなさんの御子弟は、最も勇敢、最も冷靜に、空中からも、地上からも敵彈の雨飛する中を、毅然として苛烈な、大東亞戰爭をやつてのけてゐます。物は考へ方、諦め方が大切で、我々の命にせよ不用意なために、つまらぬ犬死をしてはなりませんが、その大切な命にしても、不幸にして爆彈が、あなたの頭上から直擊で來たなら、それこそ百年目で最早逃れやうはない。が、實は其の日の朝がた、腦溢血でウーンと逝く所を何時間か、後の今やられたんだと、諦める事ですと、答へ、どつと爆笑の聲を聞いた事もあつたが、兎に角綺羅びやかに、着飾つて舞臺の上で踊つたり、お座敷で茶の湯を立てたり活花をしたりする、お姫さま藝とは凡そ事が違ふ、命の取り遣りをするのである。

斯う、考へて來ると防空戰下の服裝も、彼れ是れと、論議する餘地もない明白である。

よしや、軍人とか、勞働者でなくとも苟も、空襲に備へるといふからには、卷脚絆や、モンペ位いは當然の事である。況してや、超速度でやつて來る敵機に對しては一寸おうちに歸つて仕度をして來ますなど云ふ、悠長ないとまのないことも當然だから、なほ更の事である。だから防空戰といふものの實相を認識し、不覺を取つてはならない。必勝を期せねばならぬと云ふ、戰ふ國民としての信念さへあるならば、當局からの達しだからとか、翼壯あたりがやかましく云ふからとかでなく、國民各自が、自ら工夫し準備さるべきものではあるまいか。そこでわたしは、工夫、工夫と繰返して云ふが、戰さをする爲の服裝には、見榮だとか、品質の良し惡しだとか、そんな事

は問題でない。要は敏活輕捷に、而も確實に戰鬪動作が出來得るにある。

卷脚絆が、手に入りかねるならば、ズボンを着て脛の上と下とを、紐などで括つたので結構間に合ふ。更に女子のモンペでは、平常用と、訓練用とを別々に、金目に眼をくれず作る上流？　の婦人もあると聞いたが、戰さに見榮を織り込まうとする、有閑級にあり勝ちな謂はば、長袖流の考へ方で、愚も甚だしいと言はねばならぬ。第一そんな手本を示されたのでは、下級家庭の婦人達ちはたすからぬ。又そんな、立派なモンペを實戰に着る事があつたとしても、必ずしも其の婦人が殊勳甲の働きをするとは考へられぬ。却つて腰を拔かす方の組ではないかとさへ想はれる。結局、實戰に鑑み、充分役立つならば、最少限一着あれば充分間に合ふ。それつ、眞敵がやつて來た。二號品に着換へねばならぬなどと云ふ手間も省ける。娘も追々年頃になつたので、一着必要だが、格恰な利用品もないとあらば、男子のズボンのお古を利用しても良い。

窮すれば、通ずると謂ふが實は、人々の創意に依つて通せしむべきもので、戰ふ國民として自ら直接戰さをするといふ事實を、眞劍に認識し自覺しさへすれば、そう難しい事柄ではない。

つまり、わたしの謂ふ工夫とは是れを强調するのである。

併し、モンペを眞の決戰生活に徹底する意味から、他の贅澤品を節約して實用的な材料で作り常用服にするといふのならば、着替用の一着もあつたからとて、わたしは反對するものではない寧ろ推奬したいと思ふ。

次に、外出の問題であるが大戰下とは謂へ、日曜の花日和でもあつたし、凝り初つた羽翼を大いに伸ばし、次の活動を準備すると云ふのなら意味がある。それにわたしと同樣公用務を帶びてゐた人も少くなかつたらうし、また、平素から嵩んでゐた要件を併せて果そうと云ふ、人もあつたらうし、外出したからとて眼をむいて叱り飛ばすほどのこともないが、併し、空襲警報が解除されたからとて、空襲必至が解消したとでも云ふやうな、行過ぎた安心感から家を、全る空けにする事はどうかと思ふ。

敵の空襲は、我が虛を衝き意表に出るのが、戰術上の常則であるし、警報も不意打ちに發令される。或は警戒警報なしで、初めから空襲警報が發令され、同時に防空戰

闘を交へねばならぬ場合が、普通一般の實相であらうと、想はれる。で、あるから全戸を擧げて外出し、大いに愉むのも良いとして、それ空襲だといふので慌てふためき歸つて見ればもう、灰になつてゐたのでは、如何に臍を嚙み、天を恨んでも追ひつかぬ。そこで一方に空襲必至といふ戰時情勢と、一方に、自ら衞るといふ防空戰とを、睨み合はせて外出も戰時型に律して行かねばならぬ。所詮、戰ふ國民の生活は戰爭を基底とする。健全生活でなければならぬ。健全の二字を冠する戰爭生活は、決して愉みも、朗さもない憂鬱生活を意味するものではない筈である。

とまれ、戰さの出來る服裝をせよと云はるれば、之に對する文句逆ねぢの工夫をしたり、今日の日曜は一人殘らず、××に行つて遊び歸つて來たのは、夕方でありましたなどと、他人に喋べる圖は決して、誇りにはならぬ。それよりも先づ、各人、各家庭の防空必勝陣完整が、先決でなければならない。

――偖て、斯うは書いたものの、今日敍上のやうな事實が現在の日本に、至る所あると云ふのではない。最早今日では、脚絆をつけずに、モンペを着けずには、恥かしくて街は歩けなくなつて來た。お隣近所へ、今日は私の方は皆外出し家を空けますので宜敷く願ひます。などと一言挨拶するのさへ氣がひけてよく言へなくなつた。それほど、國民は自覺して良心的になつて來てゐる――。

櫻から青葉の頃にかけて見た。防空必ずしも憂ふるに當らぬ。されど一部にはこんな、心ない考へを持つた人もあつたのであるから、國民たるもの大いに三省九思して見る必要があらう。

―先手、防空―

既往の世界戰史には、「勝利か然らずんば屈伏」といふ形態で、終局を告げたのもあつた。しかし現在の大東亞戰爭は決してそんな生優しい戰爭ではない。敵にしても、我れにしても「勝利か然らずんば滅亡」である。敵側にしても尋常一樣のことで參つたと音をあげ、屈伏して事を解決しやうなどと云ふ事は到底考へられない。

これほど、彼我共に國を擧げて戰つてゐる血みどろの大決戰であるからには、倍々

長期化するであらうし、また愈々凄慘深刻化する事も當然であらねばならぬ。

ところで、戰ふ諸國民の多くは、近代戰に於ける必然の過程としてあの苛烈極まる空襲の體驗を屢次味つて來た。併し我が國民は殆ど空襲らしい空襲と云ふ程の體驗を經てゐない——經驗がなくて幸ひ、求めて體驗すべき事柄でもない——が、到底このままでは濟まされそうでない。かるが故に、そのいづれを問はず、敵機の空襲に備へ萬全を期しておくに、如くはないのである。

今年の始め頃、ロンドンタイムス紙は、獨逸空軍に依る自國の被害狀況を、寫眞入りで報じ證據立ててゐた。

それによると、ポーツマスに次ぐ第二の軍港プリマス港市は、目拔き商店街は全然姿を消し、破壞區域は百五十エーカに及び、四萬戸以上の家屋が破壞され、殊にデヴオンポート勞動區の如きは僅かに殘骸を殘すのみだとある。固より斯うした、敵側の情報は容易に入手されないので、その他の被害狀況は知り得ないのであるが、その寫眞の情景を一瞥しても他の都市に於ける慘狀も、相當深刻なものであらう事は想像に難くないのである。

我々は、我が陸海空軍の威力による重慶、眞珠灣其の他の凄慘な姿も屢々寫眞で見て來た。これが殆ど木造建築である日本の都市であつたならば、どんな姿になるであらうかと、一應想像して見ずにはゐられない。

なにも、びく〳〵と取越苦勞をして、恐怖症患者になる必要はないが、一度び敵機の空勢をうけ、人も、家も、物も叩き潰され、灰にされてから後に氣付き、悔やむやうな「後手打ち」はしたくないものである。

——須く、防空は、豪壯、放膽、周密、徹底と、あらん限りの人事を盡し「先手」を打つておかなければ嘘だと思ふ——。

わたしは、「戰略戰術も常識だ」と云つた。しかし、此の場合の常識はありふれた凡識の謂ひではない。正道と詭道を貫く「誠道」に發した常識——まことのみち——である。「まこと」の常識は、我が必死を以て敵の必生を打ちとる——即ち「まつろはぬ」者どもを「まつろはする」敵の無道を伐つ道——である。從つて誠道を基とし

た戰さに勝つための常識は、時には非常識にも見へる場合がある。則ち常道の外に求むる「奇功」がそれであつて、兵法にも明かに「虛實」の必須なるを敎へてゐるではないか。

孫子曰く「兵者詭道也」と、詭者奇也、要するに敵の意表に出でて戰捷を獲得するのである。孫子又曰く「凡識者、以レ正合、以レ奇勝」と、正々堂々と常形通り合戰しては、負けはすまいが、奇を用ひざれば勝てないぞ、と云てつゐる。

所詮防空戰も、凡常識を、非常識で制し、不可能事も可能事たらしむるほどの、卓絕した何者の追隨も許さぬ創意工夫と、熾烈旺盛なる敢闘努力、斯うした人力のあらん限りを盡してのちにこそ、始めて天佑神助もあらうと云ふものではあるまいか。

或る人は言つた。多言無用、何處かに一發どかんと落してやれば立ち所に分る——と、もつともなはなしである。しかしそんな冒險は出來やうもない。又そうまでせねば分つて呉れぬ國民でもない筈である。とまれ、眞敵が出現し眞彈を投下して、犧牲者を出だし損害を被つたならば、如何に體驗をし合點が行つても最早始めの終りで、不覺な「後手打ち」の見本以外のなにものでもない。事前に於ける周到鐵壁の「先手打ち」こそ絕對必要とする所以である。

― 實戰的訓練 ―

これは、或る所の民防空訓練での話であるが、隣組女性防空戰士達ちがいきなり水を頭からかむつて、エレクトロン燒夷彈に挑みかかるのを見た。また地上掃射や、爆彈落下の情況を與へられると、水びたしになつた道路であらうが、溝の中であらうが迅速適確に地形地物を利用して伏せをし或は遮蔽すると云つたやうな、眞劍な敢闘振りを見た。ビルマ方面に於ける米英の空爆をつぶさに體驗して來た人々の話を聞いても、これでどうやら實戰的防空戰の形態を備へて來たと、內心我が意を得たと云つたやうな賴もしさを感じてゐる矢先きに、一方には、訓練も茲まで來ると必要以外のゆきすぎだ、と云つたやうな批評の聲が出て來た。

なるほど、必要以外の無駄や行過ぎならば、洵に愚な話であるが、しかしわたしは、

「訓練」に限つて先づ「行過ぎはない」と斷言する一人である。もとより訓練には指導者の能力に依つて巧拙はあらうが、少くも實戰といふものの實相に想ひ到るならば少々の度を過ぎたぐらいは問題でなく、要は精神にあると考へる。

動もすると、演習や訓練は芝居がかりの、死物となり易いのである。これを眞に役立つ、生きた實戰的訓練たらしむるか、死物訓練に終らしむるかは一つに、指導者の指導技能と、被指導者の熱意の如何に存する。他から行過ぎと見られるほどの熱意と、氣力を有し訓練に全身全靈を打込むやうな、防空指導者や、隣組人は大いに褒めてやるべきだと思ふ。何處に於ても苟も何かやらうと云ふ場合はあの人は氣がふれた、狂人だと云はれる程の熱心な努力家があつたが爲に、漸やくにして事を成し遂げたと云ふ樣な事例は、あまりに多く我々の見聞してゐる所である。

外見を飾る、宣傳的な、上つ調子の型訓練に終始し、果してこんな事で實戰の場合役立つであらうか。これで勝てるならば奇蹟だと思はせるやうな狂言訓練も、なきにしもあらずであつた。これなどは勞して效なし寧ろ行はざるに如かず——の部類である。

試みに、實戰の光景を頭に描いて見ねばならぬ。凡そ非實戰的な訓練は、ものの用に立たぬのみか時に依つては危險をさへ伴ふのではあるまいか。わたしは一般戰場の經驗を以て云ふのであるが、おそらく防空戰に於ても、一度空爆下にさらされ悲壯慘烈な狀景を現出するに至ると、最早理窟では役立たない。所詮は平素に於て訓練に訓練が積まれ、一擧手一投足ことごとくが、玄妙神秘的に「心手期せずして動く」までに精練慣熟した。練磨の齎らす。理外の力が絶對の物を言ふのであると云ふ眞理の存在を强調したい。

空理空論を織り混ぜた、展覽用物眞似訓練は、わたしは頭から排擊したい。最早そんな悠長な秋ではない。

宜しく、國民の一人、一人が此の眞劍なる防空必勝道に徹底せねばならぬ。而して訓練であれ施設であれ、一にも二にもこれを行ひ貫く所に一億總力の火花が散り、絶對不敗の力となりやがて敵空軍の包圍陣形に對する「八相の構へ」ともなる。是の事

前に於ける「必勝構備の態勢」こそは、敵をして遂に窺覦するを得ざらしむるか。よしや來たるとも必捉必滅、必ずや最後の勝利は我が手中に獲得し得るのである。斯の如く精神的にも、實質的戰力の上にも眞の構へと、備へとが完整されない限り國土防衛の萬全は得て期すべきでない。

―鬼の嗤ひ―

この「防空斷想」を、米―英―蔣鬼等が見たならば、嘲や嗤ふことであらう。併しその嗤ひは、內心恐怖を感じての慄きのわらひ、乃至は宣傳の具に供せんとするしたり顏の笑ひか、とまれ碌でもない惡魔的な嗤ひにきまつてゐる。敵側にとつて大戰の現段階に於て、腹の底かる抱腹絕倒といつたやうな、わらひ方をする餘裕が果してあるであらうか？

苦しまぎれの惡魔笑ひは、毫も我れの氣に病む所ではない。我が陸軍の間に「最後の五分間」といふ言葉がある。當方の苦しい時は、相手もより以上苦しい時だ。その最後の、絕頂の苦しみを頑張りぬいた者が最後の勝利を獲得するといふ敎訓に外ならない。であるから防空斷想に現はれた、素人の常識的敵情判斷や、我が防空態勢を見て嗤ふのならば、これは覺悟の前であるし取るに足らないが、敵側には「最後の五分間」を徹透徹尾戰ひ拔かうとする。その餘力をも含んだ所謂惡魔的な、薄氣味の惡い嗤ひを多分に看取されるのであつて、これは油斷がならない。侮る理けにゆかない。もとより怖れるには當らないのであるが、敵を侮り甘く見るといふことは絕對禁物である。また陸海軍の精强に賴つたり、または樞軸國相互の戰力や、政治的、外交的工作に賴つたりする他力本願と云ふか、どうにかなるであらうと云ふやうな樂觀的な思想は、國內の何處にも底迷させて置いてはならない。知何なる最惡の狀況に遭遇しやとも、腕一本、脛一本の自衛自存で行かなくてはならぬ。

自ら戰ひ、自ら勝ちを制し、自ら衛り、自ら生き遂に八紘爲宇を成す皇國民獨自の信念が、ちやんと肚に決つてゐるならば、敵側の謀略や神經戰がどう働きかけて來やうと、局部的の戰局がどうであらうと、一喜一憂などはあり得ない。地球上より葬ら

ねばならないアングロサクソン民族は二億四千萬、大東亞共榮圈内の人口は一〇億、人的資源から云ても必勝は疑ふ餘地がない。若し日本帝國民の一手に戰ひぬくとしても、支那事變以來敵の四乃至五名對日本兵一名で戰ひ勝ち通して來た。二億四千萬の敵を賭るには六千萬人あれば足りる、そうして尙四千萬人の健存が確實である。四千萬人が殘つて與れたならば悠久無限に、神州民族を存續し發展せしむるに何の支障もない。少々行過ぎた考へ方かも知れないが、窮極の覺悟をここまで切り下げておけば、迷ひも不安もなく一路必勝に驀進することが出來やうといふものである。

わたしは特に、茲に三つの事がらを擧げて置きたい。

其の一は、大戰下の今日に於ても尙自由主義的な、猶太的な思想の殘宰が、國内の何處かに遺されてゐると云ふ事實である。所謂國家の戰爭行爲と相容れない反時局的な利己的惡德行爲を謂ふのであつて、此の唯物觀的己人主義的な事例は、容易に跡を絕つに至らない、それが如何に國防の完璧を期する上に障癘となつてゐることか、一々枚擧せない方が賢明と云ひたいほどである。が、一度敗戰の慘を喫したならば最早個人的な幸福も何もあつたものではない。元も子も殘らぬ、總べては土臺ぐるみにて吹飛んでしまうと云ふことである。——分り切つた事だと嗤ふなかれ、反復省思して見らねばならぬ。直言すれば戰さに敗けて何を希ひ、何がのこるか、と、云ふことである——。

其の二は、外征戰に勝つても、直接國土防衛戰で慘敗したならば、所詮結果は同一であるといふ事である。また國内防衛戰で參つたのでは、外征戰に勝ち得ることはあり得ない。

其の三は、繰返して云ふやうであるが、現在に於て敵機の空襲をうけないといふことは、將來永久に敵機の來襲はないと云ふ保證にはならない事である。東京空襲の不成功であつた事は敵も充分に自認してゐる。併し敵國は飽くまでも、現在までに於ける戰勢の挽回乃至は絕對勝利を期せんとして、空軍兵力に物を言はせんとする不動の方針が決つてゐる以上彼れの空襲實行は必至であるし、而も一度敢行するからには絕對的の效果を收めんことを企圖し、機數に於ても、戰鬪力に於ても、最も大膽に、最も

放膽に、最も大規模に徹底したる用意と準備とを以て、又絶對的の確信の下に、堂々の態勢でやつて來るであらう。――小面憎い話であるが敵米一流の、大膽徹底的に物事をやつてのける、彼の國民性から來る野太さで疑ふべくもない――と、云ふ此の三つである。

―大規模とは―

最後に、前に述べた第三の所謂「大規模」の空襲に就て少しく述べて置かう。

米、英空軍の、獨、伊に對する空襲傾向から見ても、或はビルマ、其の他南方戰線等に於ける米空軍のそれを見ても、都市や要地の空襲に於ては效果の少ない、數機編隊と云つたやうな小刀細工的な、半端空襲は漸次一擲して、極めて徹底的な大規模なる大編隊を以て來襲し、而も其の打擊を回復する餘裕を與へず、反復執拗にこれを實行すると云つた方法を取つて來たことは最近最も、顯著なる事實であることに注目を要する。

例へば、屢次に及ぶ南方〇〇〇方面に於ける空襲も最近は一〇〇機内外を普通とし一五〇機二〇〇機と漸次多數機の大編隊となつて來てゐる。支那大陸に於ける米空軍を見ても、縱へ在支我が陸軍航空部隊の反擊があるにもせよ、數機編隊で日本本土空襲を實行しやうと云ふ企圖を有するならば、決して不可能としない筈である。所が輕々には出擊せず、一意支那に於ける空軍兵力の整備增强に、躍起となつて努力してゐる實狀から推しても、彼の企圖する所が略察知されるのである。

故に、一度我が本土に來襲するとなれば、愈々本格的な大編隊を以て來襲するであらう。

その機數は、遽かに豫測を許さぬがベルリン、ローマ等の空襲狀況から判斷して五〇機、一〇〇機と云ふやうなものではなく、少くも五百機から、一千機の大編隊であつた。

又伊太利の心臟部ミラノの空爆は、一千乃至二千機の大編隊群であつたとも謂はれてゐる。なほ東部線戰に於ける獨、ソ兩軍も各々一千機内外の空軍を以て連日雙方が、

鎬をけづつてゐた事實も稀としない。

而も、爆擊による餘燼のいまだ熄まない時機を狙つて繰返し〳〵猛爆されることを覺悟せねばならぬ。同時に使用彈の如きも一番大きいものになると四噸、それから三噸、二噸、一噸といふのがあり二年程前では一、八噸程度であつたのが二倍以上も大きくなつてゐる。なほ空中魚雷或は空中爆雷と云つて、地上五〇米から百米附近で破裂し、地上廣域に亘つて彈子と破片が飛散するといふ極めて威力の强大なるものを使用する。つまり單なる破裂威力とか、爆音とかで人間を神經的に、參らせやうと云ふ樣な生優しいものではなく、最も徹底的に、最も大量に人畜を殺戮し、建造物も破壞することを狙つてゐるものである。特に相手が狂人に等しい米鬼の事であるから、學校とか、病院とか、無防備の住民地帶であるとかそんな事はお構ひなく所謂「無差別盲爆」を行ふこはと、四、一八東京空襲の手口から見ても、我が病院船に對する爆擊を見ても、其の他獨伊方面に於ける空爆狀況を見ても明白である。

最もその顯著なる事例は伊太利に於ける例の世界的宗敎の殿堂である、ローマ法王廳のヴアチカン宮殿に對する爆擊である。この宮殿こそは正歟と思つて何んの防備も施してゐなかつた所へ米英空軍は、やりもやつたり大戰開始以來未だ曾て見ざる大空爆を實施し、伊國民ばかりでなく全世界人をして啞然たらしめたのである。そしてルーズヴエルトは此の無法極まる大空襲に對する釋明として「軍事的行動の餘勢として己むを得なかつたものである」と、そら嘯いて、恬として愧づる所がないのである。

特に、米鬼が我が病院船を攻擊した事實はすでに十數回に及んでゐる、洵に言語道斷な、非人道的な、天人共に容せない鬼畜の行爲である。これらの點から觀ると彼は、「戰爭」を、やるからには是が否でも勝たねばならぬ。捷つためには最早、國際法も赤十字條約もあつたものではない、病院船であらうが、なんであらうが手段を選ぶ所でない、片つ端から痛擊を加へ武力的戰果を揚ぐるに如くはない。と、云つた樣な我々日本人の常識を以てしては、到底判斷の出來難い狂犬じみた、徹底した「戰爭觀」を持つてゐるやうに想像されるのであつて、これから考へると——もつとも東洋の例ではないが——「無防備都市」などの發表も、斯う云ふ相手にかかつては、果してど

れだけの效果があるのか、一寸疑がはしくなつてくる。此の惡鬼のやうな彼は、つい
さき頃まで世界人道主義を唱へて巧みに僞裝してゐた憎むべき國民で、茲に全くその
假面をかなぐりすて本性たる野獸性の生地をむき出したまでの事で、今更驚いたと云
ふのではないが、此の世界人類の公敵メリケンの、箸にも、棒にもかからぬ相手であ
ることを、今一應再認識しなほしてから、豫想される來襲も、凡そ人間ばなれのした、
惡魔的な、大規模のものであることを充分に覺悟して、是に對する我が防空態勢も、
眞に劃期的な飛躍性を事實の上に徹底させ、確乎たる勝算の上にも尙十二分の餘力を
保持するまでに、確然、一歩を踏み出して置くべきである事を强調して置きたい。
言、甚だ事大、誇張にも取れたと信ずるが、わたし自身としてそんな「作爲」を弄
する必要はなかつた、現實に迫つた心の叫びである。
萬一、敵機の來襲が無かつたとしても、わたしの故ではない。
若し、敵の本土空襲が實現せずして大捷を博するに至つたならばそれは上神靈の加
護と、大御稜威の然らしむる所であつて、下萬民のさいはひこれに過ぎるものはない。

要は、「防空の絕對完璧」が期せられ、國土防衞戰にも勝拔き、大戰の終局を「完
捷」に導くものは、眞に「擊ちてし止まむ」に徹底した軍民決死の力「國民性の强さ
と、ねばり」とが、最後の物を言ふものであることを附言して結びたい。

「防空斷想後記」

戰爭は、ひとり相撲ではないから、水物のやうな性格も或る一面に於ては見られる。
防空を、敍上の如く斷想はして來たものの、時々刻々變化する所謂「世界戰局の情
勢」は、昨日の判斷必ずしも、今日の狀況ではあり得ない。
從て敵機の來襲も、一方面のみとは限定されない判斷の資料が生れつつある。さら
に「戰場」に至つては、過去に於ける外征戰史の例を破つて、我が本土内に逼りつつ
あることが彌々と感ぜられて來た。特に世界戰爭も、樞軸、反樞軸と兩分されてはゐ
るが、最後まで土俵にのこり頑張り通す大將格は、何處の何國(たれ)であるかも、一應檢討
して置かなくてはならぬ。而も西南太平洋方面に於ける敵の「物と量とに依る反攻」

は、愈々熾烈凄慘を加へて來た。それからルーズヴエルトや、チャーチルを中心とするケエベック會談の內容も、全部が空嘘な蛙聲とのみは斷じ得ない。

まことに、大戰の前途は容易ならざる酷烈秋霜の嚴しさがある。斷じて手近かに見られる隣村の山火事ではない。

戰爭は水物の如き性格を持つと云つたが、坐して勝運を待つ手はない。

今こそ、切實眞劍なる國民全體の、肚と腕とに最後の解決を問はれる秋が來たのである。

——茲に於て、わたしは國民に向つて覺悟と用意は宜しいかと、大聲疾呼したいのである——。

―九月九日朝―

わたしは校正の爲に、此の稿を再讀して見た。其の日の午後、伊太利「バドリオ」政權が、敵國へ無條件降伏をしたとの報を聞いた。

併しわたしは驚きはしなかつた。と、云つても全然無關心ではあり得なかつた。

と、いふのは此のバドリオ政權を、裏切者だとか、通敵政權だとか憤慨もして見たけれど、所詮つよい、賴みになる、逞ましいおぢさんにはなつて呉れさうに考へられなかつた。そんな問題よりも、あまりに深刻な敎訓を提供してくれたといふ一事である。

なぜ、降伏せねばならなかつたか?。あの戰禍の渦の中にゐながら伊國民は、歷史の舊いローマー文化の夢の中ゐて、敵の空襲といふものに關心が低調であつた、それは無防備に近いものであつた。——幾多の數字的事例を持つが書く自由を有たぬから省略する——全く油斷の天罰である。一度爆擊をうけて見ると、そのこたへ方は伊國民に取つては一人ほどぎつく響いたに違ひない。これに參つてしまつたのである。

二年、三年が戰爭の絕頂とするならば、喰はず、着らず、眠らず戰ひ通しても、敗戰後の苦痛慘酷に較ぶれば、物の數ではない。戰さに敗けて、元も子もなくしたのでは諦めやうがない。

この、痛ましい『伊太利の悲劇』を教訓として所謂『禍を轉じて福とせねばならぬ』わたしは、重ねて國民に防空強化を叫んで置きたい。

三　戰爭と鰻

泉都に住む、Sさんは今年六十六歳で私の家内の遠縁にあたるのだそうだが、勿論血つながりと云ふ程の近い關係は、ないのであるが私共夫婦は、叔父さんと云つて、尊敬もし親くして戴いてゐる。

と云ふのは、家内を娶る時に世話をして呉れ、私の立場も家内側の立場も相當有利に宣傳して、圓く結んでくれた恩人だからである。

づつと前からも、此の叔父さん達夫婦が、單に斯うした緣談の媒酌ばかりでなく、各種の方面に亘つて人の世話事が好きで、而も親切な人達だといふ、街の人の間に定評のあることを聞いてゐた。

と云ふのも、夫婦揃つて至極、實直圓滿で他人から相談事を持ち込まれると、決して嫌やだと反對しきれない情義に厚い人達であるのと、一人ある長男坊はレントゲン科の技術員として滿洲某地の陸軍關係の役所に勤めて——今頃は嫁も、孫も出來て——ゐるその長男からの仕送りも相當あるのと、更に多くではないが若干の貸家もあるのでその見かじめをしながら暮すと云つた程度で、慾も客氣もない凡々型の閑人であつた故であらう。

と云つた樣な理けで、夏の頃にもなると、釣に——鰻である——相當凝つてゐたらしく、いつもも通信にも釣とか、鰻とかいふ文字を見ないことは無つた程であつた。

で、私はあの叔父さんの無慾、恬淡さでは釣といふ趣味からの無念無想境に、沒入して閑を潰すことはあり得る、出來そうな事だとして、世間話の外は凡そ何事によらず無器用に見ゆる叔父さんが現實に、鰻を釣つてゐるとは考へきれず、いづれは鰻に釣られてゐる——所謂、自稱釣趣味乃至は釣道樂の域を出でない——部類の方だらうとしか考へてゐなかつた。

——當時この可愛氣？　のある叔父さんは六十歳、連れそふおばさんと云ふのが五十七歳で別に持病もある理けでもなく、至極健康人であるがこれぞといふ職業も持たず、冬は溫泉に浸つて寒さを凌ぎ、夏は釣三昧に、時には他人の下世話事で多少の氣苦勞があつたにせよ所詮は閑潰しでしかなかつたと云ふ、普通世間にあり勝ちな、隱居然たる生活をしてゐたのは事實であつたが、世間の何人も別に不思議がるでもなく、

私達自身も、人間的に倖せに暮す結構な有徳な、御夫婦だとしか思つてゐなかつたのである。

――是も支那事變前までの話で、今茲に殊更に此述懷めさたる一文を挾む所以も、もう時が遷つて來て――今にして想へば――と云ふ時相の變化に基いての事からである――。

★

ところが支那事變が勃發して、私も愈々この叔父さんの鰻釣りの伎倆を親しく拜見する時が來た。

私も○されて征く日が來たので、其の旅行途中の半日一夜を泉都の叔父さんの家で明かし心からなる歡迎――送を受けたのである。

正面に鶴見山を、左手に高崎山やあの海とも見へぬ程、靜かな灣内の風光を眺めながら列車は十一時過ぎ著いた。

お二人とも出迎へて呉れた。叔父さんは氣輕るにタクシーを拾つて私の行李を積んで呉れた。

車の中でおばさんは、

「なんにも無いけど、おぢいさんが自慢の鰻はありますからタンと喰べて征つて下されや。」

おや、やつぱり取れてゐるかなあ、

「それも結構ですが、大分御自慢も聞かされてゐますから、一つ御手なみも拜見したいものですなあ。」

得たりとばかり叔父さんは、

「それですよ、食べるのも、惡くないが、釣るのが愉しみで、どうです今日はお早い、おつきだが午から二、三時間つきあいませんか。」

「え、是非お伴をさせて下さい。」

と、顏も腕も、足も澁紙の樣に日燒けしてゐて、宛然浴衣がけの老河童と竝んでゐるやうな感じのする叔父さんは、象の眼に似た柔和な眼ばかりを輝かしてニコ〳〵し

てゐた。

自動車が家の前に著くと、先きに降りて荷物を玄關に入れてくれた叔父さんは、家に這入らうとはせず、是非見せたいものがあると云つて私を裏の水道側に東道した。

そこには一米方形の木箱を地面に埋め、水を溜め鰻が生かしてあつた。

叔父さんは、莚覆を取除けながら、鰻に陽の目を拜ませると痩せますからなあ、と説明して呉れた。

中には、大中小取り混ぜ二〇匹ばかりの鰻が氣だるそうに、泳ぎくねつてゐた。

——私は、なるほどこの叔父さんの手にも生きた鰻が釣れるのだなあ、などと失敬なことを暸りと認識し直して見たりした——。

おばさんは又、こんな事を云つた。

「叔父さんは大底五匹、一〇匹は獲つて來るんですよ、けれど家にもそう毎日鰻ばかり、喰べてゐる理けにもゆかぬから、近所の人々に分けてあげるのでとても悦ばれるんですよ、所がね、朝見川の鰻は隨分恐荒を來してゐるらしいの、だからこんな殺生はあまりわたしは好かんのですけれど……。」

と、こんな事を笑ひながら云つたが、前半は兎も角として、後半はどうかと思つた。

おばさんもなんとはなしに、撥が悪かつたと見へて、ちらりと叔父さんの顔を窃み見した後。

「でもねえ、あんたは鰻がお好きだと聞いたから良かつたわ。」

などと、私の顔を見ながら如才がなかつた。それから家に這入つて挨拶が交された、特に私の〇〇に對する鄭重な御祝ひの言葉も戴いた。

★

——間もなく叔父さんと私は、釣りの仕度をして程近い朝見川に出た。

朝見川は、乙原の瀧から流れる小川であるが何時見ても、清冽な山水が流れ夏の泉都をして一入ほ涼しくしてゐる愛すべき川である。

私共の川に這入つた所は朝見神社の參道にある神橋の下手であつたが、上手に一人下手に二人の同好者が無中になつて、小なさ竿を川岸の石垣の穴に差しこんでゐるの

を見た。

私も道具を一通り與へられ、要領も敎つては見たがうまく行きそうでないので一應叔父さんの釣り出す現場を見せて貰つてからの事にしようと默つて樣子を見てゐた。

叔父さんは、私には頓と無關心な態度で、どん〳〵向ふの方へ行き例の小さな釣竿をあやつり出した。凝と見てゐると、今まで談こんでゐた、唄ひの師匠が、きりつと座席に居ずまいを直して三味線を取つて構へた時のやうな嚴肅さで全で人が變つたかの樣に、側き眼もふらず無我無中でゐるらしかつた、慥かに眼の色までするどく光つて來てゐる樣だつた。

眞夏の午下りの陽はかん〳〵照りつけるし、もう一時間も經つた樣な氣がするので、腕時計を見たら、まだ三十分しか經つてゐなかつた。

それから間もなくであつた、叔父さんが、例のニコ〳〵顏で手麾きを吳れたから、そつと側に近附いて見た、鰻公がかゝつてゐるのらしいぴんと張つた糸を、右手の四本指に一と卷きして、徐ろに引きながら、左手は糸をしごく樣にして石の下に近づけてゐた、恰度其の時であつた、白い線が水の中にぐる〳〵つと躍つたかと見る間に叔父さんの手に、一匹の鰻が釣り上げられてゐた、私は嬉しかつた。

併し叔父さんは、あつけないと言つたげな顏をして、何にも言はずに、ビクの中へ入れて終つた。

――實は私も思はず微苦笑した――。

なんと叔父さんが、大事そうな態度で釣りあげた鰻は、女持ちの萬年筆程度のチビ助で而もその入物のビクたるやだ、鯨でも入れるのかと思はれる程に、でつかいものであつたからである。

それから私も、ようし萬事あの調子だと、腕時計も仕味込み本腰になつて大いに活動して見たが、なか〳〵手應へは無つた、それでも熱心に續けてゐるうちに、グイッ〳〵とひかれた、やれ嬉しやと胸の高鳴りを感じた、併しまてよ、失敗てはつまらぬと思つて小さな聲で叔父さんを呼んだ。

叔父さんは一寸糸に觸れて見てから、

「ふう、こりやあんた土蟹じやつまらん。」

と云ひながら糸を引き出して呉れた、見るとなるほど、餌はぷつつりと挾み切られてゐた。

尙も根氣能く續けたが、殆ど蟹らしく餌を取られるばかりで鰻の獲物はなかつた。暫くすると俄かに、邊りがくらくなつて來た、四界を見廻すと夕立が來そうである。私もなんとなく飽て來て、釣の醍醐味と云ふのにも此上辛抱してお目にかゝる氣がしなくなつて來たので、時計を見ると、川に這入つてから三時間を經過してゐた、叔父さんの方を見ると、何時の間にか相當川下の方に距離が隔つてゐた。

恰度その時叔父さんは、川から上つて田圃の畔に立つてゐたが、見てゐるとぼつぼつズボンを脱いでゐる。正歟靑天井の下で用を達する筈もないが變だなあと思つた。叔父さんは脱いだズボンを展げるやうに兩手に持つて、すうつと稻田の中に消へた。何をするんだらうかと見てゐると再び前と同じ樣な姿勢で、頤でこちらに來いと合圖をしてゐる。また其のズボンを持つた兩手には、白い物が半弧を描いてゐるのが見へる。私も好奇心にかられて叔父さんの動作から眼をはなさずに駈つて行つた。叔父さんはビクの蓋を取つて、その白い物を入れたらしい、側まで行くと叔父さんはとても嬉しそうな顏をして誇るが如く、事の顚末を話して呉れた。

「あの水溜りの中にこの鰻がゐたので今手摑みにしたんだ。」

と、なるほど田圃の畔の所に直徑二米位いの水溜りがあつて、今鰻と取組された迹らしく濁り切つてゐた。それで叔父さんがズボンを脱いだ理由も讀めた、捕へ損じぬやうに大事を取つたのであつた。

私も嬉しさと、珍しさからビクの蓋を取つて覗いて見た。叔父さんが誇り顏をするのも尤だと思つた、長さば割合ひ短かかつたが、胴廻りは四寸ほどもありそうな大物であつた。あまり大きく珍しいので私は、一寸觸つて見たくなつて手を入れて摑んで見ると、此の大鰻は少しも動かないのである。變だと思つて摑だまま引き上げて見ると、なんと半弧を描いたままかたくなつてゐる。見ると眼も白くなつてゐる死に鰻なのであつた。

それと知つた叔父さんの顏つたらなかつた。

「畜生、えらい動作をさせよつた、道埋でこんな大きな圖體をしながら、ちつとも、はねよらんと思つたわい。」

と、つぶやきながら、叔父さんは凝とその水溜りを見つめてゐたが、次の樣な判斷を下した。

「こいつは湯が湧くのだ、それも日に依て、量も違ふし、温度にも高低があるから、雨でも降る時に迷ひ込んで天下泰平を決めてゐる内に、遽かに熱いのが湧き出して來て參つたのであらう。」

と、蓋し叔父さんの判斷は、適中しないまでも遠からぬものであつたらう。

——私は全く、湯の街にありそうな、ナンセンスだとおかしくもあつたが、此の叔父さんには少々氣の毒な氣がした。

併し叔父さんは、何事もなかつた樣に、相變らず愉しそうな顏をしてゐた——。

叔父さんも、多少疲れて來たので一服つける積りで、田圃の畔に上り偶然この一件を見つけたのだと云つてゐた。

畔に腰を下した叔父さんは、莨を吸ひながら空模樣を見上げてゐたが、

「どうも一降り來そうだ、こんな時に頑張るとよく釣れるのだが、あんたも飽きて來たらうから、濡れぬうちに歸つて、ゆつくり一杯行きませう。」

と、切り出して呉れた。渡りに舟と私も、

「然うですなあ、本當にお蔭で愉快にたのしまして戴きましたから歸りませうか。」

と、同意を表して茲にこの罪な、死鰻事件を最後に引揚げることにした。

前から來てゐた三人の内、一人はもう附近に見へなかつた。

私は、遠慮する叔父さんからビクを貰つて擔つたが、年中仕事から追ひかけられてゐる勤め人の私には、正に壽命が延びる程の愉快さを滿喫したのであつた。特にビクの中には最初獲れた、チビ助のほかに、その後に於て叔父さんの稼いだ、拇指大のが一匹と、中指大の二匹合計四匹の獲物が、入つてゐたから尙更であつた。

――それから間もなく私達は、田の湯温泉の青々と澄きつた湯壺に浸つて一と汗流してゐた。恰度その時であつた、さーあつと、沛然たる夕立が激しい勢ひで襲ふてきたが二十分餘もするとからりと霽れて、午頃からの酷ひむし暑さも、消へ失せ、涼しい風さへ休憩室に吹きこんで來た。救はれた樣に浴場を出た二人が雨に洗ひ清められた流川街を、一と巡りして歸つたのは、もう黄昏時であつた――。

其の夜は、叔父さん達夫婦の眞心を單めた晩餐の歡待を受けた。中にも約束通り鰻料理が一等光つてゐたのは嬉しかつた。

私は平素の念願が叶へられた思ひで、遠慮なく食意地を逞うして馳走になつた。叔父さんは下戸の方なので、二本目のビールは半分殘したまま最後まで卓上に立つてゐた。

コップで一杯半ほど明けた叔父さんは、もう微醺どころか相當良い氣分になれたと見へて盛んに愉快な冗談を連發して、おばさんと私を笑はせた。

私も調子に乘つて、晝間の死鰻事件を危ふく出す所で、はつと氣附いてやめた。

それから私の食慾も、もう殆ど大詰に到達した頃だつた。

叔父さんは、赤黑く電燈に照り映ゆる額と、顏をタオルで拭いてから、ちよつとゐずまいを更めて口を開いた。

目出度やな鰻のやうに彈丸の中

と、得意そうに三回繰返して詠んでくれた。私も誘ひ込まれて、終ひの一回を――口の中で――合せて詠んで見た。

鰻を捉へた卽句の積りなんだらう？　それにしても、生きて還つて來いと云ふ風に取れるが……。いやそんな事はどうでも良い、表面から見ゆる形や意味が何んであらうと、この人の場合に限つて凡そ無用な詮議だてでしかない。心の底から私の爲に武運の長久を祈つてくれる、世にも類ひなき美はしい至情の迸りである以外のなにものでもない事は、分りきつてゐた。

で私も、心から感謝の辭を述べ杯を擧げてお夫婦の健康を祈り、御期待に副ふことを誓つた。

——斯くして私はこの一夜を、湯の街に過し翌朝別れを告げて、〇〇の任務に赴いたのであつた——。

★

——時は移つて全る〇年——私の陣中生活——の歳月は流れた——。

その間、或る極寒の最中にこの親切な叔父さんは、バインの空罐に鰻のかば燒を一杯詰めて、蓋には念入りにハンダ附を施し慰問小包として、遠く北支の陣中に送つてくれた事があつた。それには去年夏の土用鰻を獲つて醬油で煮つめ、瓶詰めにして蓄へてあつたものだと云ふ事を書添へてあつた。

私は本當に感激した。餘りのうれしさに、戰友達にも披露した。特に〇〇部隊長閣下も、副官も大層なお悦びやうで箸をつけられたのを記憶してゐる。

★

期せずして、生還した私は、決して意氣揚々ではなかつた。がともかく歸還挨拶のために、早速この叔父さんと、おばさんを訪ねて行つたことは言ふまでもない。

手を取らぬばかりの仕草で、大變な歡び方であつた。私も此お夫婦が、征く當時よりも一層元氣でゐて呉れた事が、此上なく嬉しかつた。

そうしてまた、豫報をしてあつた故もあらうが心からなる、歡迎陣が張りつくされてゐた。私も心から嬉しかつた。既に兩親を此の世に持たぬ私には肉親の父母の許に還つたやうな感じであつた。

卓を圍んで交した挨拶や、積る山々の話に時が移り電燈がついて、其のままおばさんの心をこめた晩餐の食卓に變つて行つた。

杯を取らされ祝つてもらううちに、〇年前の征く日の事が想ひ出された。

私も、かうして生還しお目にかかれた事は確に、あの時叔父さんの贈つてくれた俳句のお蔭で、能く適中しました全くあの句の中に含まれた眞心が通じ、神明の加護となつたものであらうと思ひますと述べ、更めて御禮を云ふと、

「まぐれ當りだなあ、併しまぐれ當りもこんなのは目出度よ。」

と、叔父さんは吐き出す樣に云つたが、まんだらでなさそうな、嬉しい顏をしてゐ

た。

と、また今度は叔父さんの方から、例の死鰻事件の經緯を持ち出して、互ひに腹の皮の撚れるほど笑つた。

銚子を取つて、私の杯に滿して呉れたおばさんが、私と、叔父さんの顏を見くらべてから、思ひ出したやうに、

「こんな目出度い日に、あんたの好きな鰻がなくていけなかつたねえ、此頃はおぢいさんがとんと稼がなくなつたもんだから。」

かう云ひながら、私の前の空き皿をそつと、お盆の上に取つてくれた。

なるほど、どの皿にも今話題にのぼつた鰻は出てゐなかつた。で私は、

「いやあ、お心盡しはありがたう、併しこんなに寒くなつては、いくら名人の叔父さんがつきつける餌でも、奴さん喰へますまいよ。」

と、率直に應へて笑ふと、今度は叔父さんが眞面目顏で、

「いや、朝見川は、お湯が流れますでなあ、今でも釣れますよ、が私があんたの征つた翌年の春から閑がなくなつて、ぷつつりやめたと云ふのでもありませんが、老人も戰さをする樣になつたので、釣道樂どころではなくなりましたわい……」

と、斯う語つて今度は本當に、愉快そうに笑つた。

この話を聞いた私は、冬の日でも鰻が釣れると云ふ、溫泉地帶特有の現象に對する、興味もあつたが、何か他に深い意味が含まれてゐそうな感じがしたので、私はさりげなく、

「ほう、前の樣におひまがなくなつたとは、何かおはじめになりましか？」

と、かう訊ねて見た。

この私の問ひに對する、老夫婦の交々語る所を要約して代辯すると、

「いくら、日々の生活に不自由がないからと云つて、此超非常時局下に、まめな體を持ちながら如何にも老人の樂人氣取りでゐてはなんとしても相濟まぬことだからと云ふので、叔父さんは市役所の水道課に勤め、おばさんは家の中の、しまひをすました、合間々々に附近の竹細工屋の手傳ひをしてゐる、もつとも滿洲にゐる息子達からは、

追々年も寄つてゆく事であるしお勤めはせぬが、おふたりが進んでおやりになる事ならば反對はせぬ。大變結構なことだと悅んでくれてゐる――そんな事情で叔父さんも前頃の樣に釣りにも行かれない。お役所もこの頃は休日が來ても何か、彼か御用があつて、そんな悠長な閑もない。それにまた從前の行きがかりもあつて人樣の世話事も斷りきれずます〳〵範圍もひろまり、件數も多くなつて來たし、川漁りの沙汰ではなく體が幾つあつても足らぬやうな有樣で、おかげで元々夫婦共病氣もなかつたが益々元氣になつて、こんなに若返つて來ましたよ。」

と云ふのであつた。

私も杯を下に置いて、一心に聽入つたが、聊かの衒ひもなく、飾りもなくぽつりぽつりと過去を追懷するかの如く語り終つたおふたりの顏は本當に明るかつた。

なる程、元來が樂天型で、健康な御夫婦ではあつたが四十歲臺にも見へるやうに、顏や手の皮膚もつや〳〵してゐた、――叔父さんは川漁りをやめたせいであらう。前の樣に酷い日燒けはしてゐなかつたが――そうして何か希望に輝き切つた樣子も窺はれ、一層家の中まで明るくなつてゐるやうに感ぜられた。

私は、これを聞いて言ひ知れぬ、驚きと、敬虔の念に胸を打たれ、自然に頭が下つて、眼頭の熱くなるのを覺へた。

最早、生活の道が充分に確保されてゐるし、これが過去に於ける日本國民の生活態度であつたなら、今更この老人が働きに出ることは恐らくなかつたであらう。それに一度び身に泌みこんだ、樂隱居生活の殼からは如何に環境の要請があつたからとて、容易に脫けきれぬのが弱き人間の常であるが、克くもまあ――それに夫婦揃つて――そんな氣分になれたものである。それに叔父さんの世話事にしても社會狀勢が斯う複雜化してきては、罷められぬのみか倍々多くなつて來たと云ふが、尤なことで、餘程の勇氣と決斷がなくては、尋常一樣のことで出來る事柄でない……と、私は心からの感激を抑へ得なかつた。

――想へば支那事變も茲に四年を戰ひぬいてゐた――。

固より最後に必勝の確信を有する。されど終局の時期なるものは何人も豫斷し得る

所でない。

戰ひは、既に長期戰の相貌を露呈して來てゐる。是を闘ひ捷ち拔くものは獨り前線の將兵のみではない。これを闘ひ拔かすべく、戰力の擴充、增强、推進にたたかひ拔くのは、後方に於ける一億國民に課せられたる重大任務でなければならぬ。

この銃後國內戰に闘ひぬく國民は、悉く此の老夫婦の崇高なる滅私奉公の大精神に學び徹しなくてはならぬ。

と、歸還早々の私はこの老夫婦から事變下國民としての、烈々たる心構へに就て教へられた事の甚だ大きかつたことが何よりも力强く、嬉しかつた。また此處にも眞の日本人らしい鴛鴦一對を見出した感じがして洵に愉快でもあつた。そうしてなんだかこの、老夫婦の姿から御光がさしてゐるやうにも見えた。

私はこの時局型な、氣なげなる老夫婦に對し、一層の尊敬と親愛の念を深めると共に、あらん限りの感激と、禮讃の辭を惜しまず呈して激勵し、乾杯して貰つた。

と、叔父さんはもとの朗かさに還つて、

「いや、今日はこんな老人の愚痴を聞かせるのじやなかつた。其の上そんなお言葉を戴たのじやたすからん、それよりもあんたのお祝ひが。」

と、言ひながらおばさんに眼くばせした。

おばさんは素速く、銚子を取つて注いでくれた。

銚子を置いたおばさんは、

「かういふては變だけれど、お酒も今頃は配給でしてなあ、もう山は見へとりますがあるだけは飲んで下されや、家にはいらぬものだから。」

然う云ひながら矢次ばやにまた、注いで呉れた。

いかにもおばさんらしい言ひ草であると、嗤ひたくなつたのをやつとこらへた。

これが、口數の寡いおつとりした所のあるこのおばさんの精一杯の、もてなしぶりなのであるからだ。

この愛すべきおばさんの姿を、それとなく見直した瞬間、きらりと私の腦に閃いたものがあつた——。そのひらめき出た、順序其のままを私は直言した——。

「ねえ、おばさん。」

「……」

少々更り過ぎた、呼方になつたので私もはつとして、落ちつきなほしてから、

「戰爭――戰爭ではない支那事變だが所詮、やつてゐる事は紙一重ほどの違ひもない。戰爭行爲ですがねえ、この戰爭と云ふやつは大變なしろものですよ――この戰爭が、どこやらの老人夫婦を、心から感奮興起せしめて、忠義をつくさせた上にも更に忠義を盡させようと、銃後の戰さに挺身せしめた――その爲に、そのためにですよ、おばさん、朝見川の鰻がたいへん助つたと、大悅びをしてゐる――と云ふ話があるがこれはいかが。」

と、期せずしてわあつと、朗かな爆笑が起り、稍々かた苦しくなつてゐた、空氣を大いに取戻した態であつた。

とくにおばさんに、この意味が通せぬ筈はなく、小いさからぬからだに波打たせて笑つてゐた。

それからもたのしい、回想談は盡きなかつたが、おばさんが三度目の手爐の火を、注ぎ足してくれやうとした時おことはりして、私の爲のお祝ひの幕を閉じて貰つた。

★

その翌日の午後、辭去した私は、車中に落ちついてから――もう一度前日來滿喫した、愉しさを想ひ返して見た――。

そうしてあの、氣なげな翼賛老夫婦を、これからお父さん、お母さんと、呼せて貰ひたいものだと、こんな事を空想しながら、泉都にさようならを告げた。――初冬の陽光に灣内は冴へて、佐賀の闘の煙突も見へてゐた――。

★

――それから幾何もなく、大東亞戰爭が勃發したのであつた。

爾來、貧乏暇なしの私は、時折りの通信のほかは、お目にかかる機會もなく早くも一年有餘を經過して、茲に大戰第二回目の春を迎へたのであつた。

が、この翼賛老夫婦は依然健在で、而も老軀に鞭打つての御奉公ぶりも、昨年夏頃

某新聞社主催の「親切人」投票の中に、叔父さんの名を見たし、尙多數媒酌記錄の保持者として〇〇より、表彰されだと云ふ事を聞いてゐるし、此上多くを語るを要しないのは眞に嬉しい。

と、云つた理けで此の稿をなすに方つても自分達一家を結んで呉れた、當の老夫婦に對する禮讃だが、何の斟酌も、なんの氣がねも必要としないことがまた、たまらなく愉快である。

――頃日來、思ひ出して、お父さん、お母さんと呼ばせて慾しいと書面で御願ひしてあるが、未だ返辭を戴くに至らない。

或はそんな願ひ出では、野暮天であつたかも知れぬ、――もう諾の有無に拘はらず斯く呼ばせて戴くことに決めてはゐる――。（昭和十八年新春）

四　腐魂・清魂

世の中に、裏表のないのは蒟蒻だけだと云ふ話もある程だから、恐らく裏表――表裏のないものは稀であるに違ひない。

そうして此の表裏は、在つて善いも悪いも無い場合と、表裏があつてこそ値うちのある場合と、表裏がある故にものの用に立たず却つて煩しいものにし、用途命數を制限するか全然手のつけられぬ場合もあるやうだ。

これが物でなく、世の中――世間――人間といふものの場合はどうかと來ると、少々問題は蒼蠅なつて來る。

先づ表の悪い役立たぬ場合は少ないが、裏に至つては裏の裏、それに支脈がついて其のまた裏と云ふ場合もあつて、かなり面倒なしろもので、無い方が良いものの様にもある。

能く世間の人が、私は全く白紙なんです。萬事この白紙から出發して勉強したいと思ひます――と云ふやうなことを、最初の挨拶がはりに一言する例は決して少くない。其の他何事かを計畫し立案する場合も、或は新規播直しと云ふ場合も一應白紙に還つてから――と云ふ風に、白紙といふ言葉はかなり多く用ひられる。斯く人にも、自身にも誓つた人々がその最後をどう全うしたか、どんな結果に終つたか、悉く終末を見屆けてはゐないが、彼れも、此れも悪るからうはづはないと考へられる。

併し其のいづれにしても、事を始めよう、發足しようとする劈頭の心構へなり、覺悟としては良い事だと考へる。

見た通り白紙は、白紙で一點の雲りもない表も裏も用ひられる、清らかな、最も聖なるものと見られる。見られねば少くもなぞらへる事は出來る、――この聖なる姿は、神の明であり、神の姿でもあり、何等の私念も、俗念もない全く神の心に通ずる、明鏡止水の境地に沒入し切つて、物を見極め、策を煉り、實行に移らうと云ふのだから悪からう筈はないのである。

そうなると、世の中――人間界――には、表裏は無くても良いのではなく、無いのが良さそうである――と云つても硝子の様に、暗さのない明るさ――透明――は良いとして、人間で言ふ肚らしい造作のない――うら、おもて――無しも感心出來ない。

これが物であるならば、裏表と云ふが實は其のどちらもが、表として使用が出來たなら今日の御時世にもつて來いだと思ふ。人間も表裏がなく、白紙の様にうら、おもてどちらも――表――としてお役に立ちたいものだが、なか〳〵そうはゆかない、所詮人間の裏表と物の裏表は似てゐて、通じぬものらしい。

この裏表と言ひ、なほ蔭日方――日向とも云ふが茲には日方として置く――と言ひどちらにしてもそう縁遠ひ意味の言葉ではない。また決して、善い意味のものでもない事は分切つてゐる事と思ふのだが――世の中は、裏も表もありましてね、――と如何にも意味深的なものらしく下世話物にでつち上げてから――諄々として說き立てる人も決して少くない。これだけ不明朗で憂鬱な話はなく、洵に好もしくないが、こればかりは遽にどうにもならない。あれほど嚴しく戒律の多い佛徒の世界にすら、外面如菩薩、內心如夜叉と云つたやうなのがあつて、かなり手を燒いた事が窺はれる。況してや凡俗の人間世界に於ては、尋常一樣のことでは拂拭されそうでない。

ところで世の中から、裏表と云ふものを全然取り除いたならばぱつと明るくなるか、あのいんきくさい部分が消へうせるかといふと、斷じてそうでない――うら、おもて――と云ふものがあつてこそ大いに世が治つても行くし、世を明るくもし、惡業のつよい衆生も救はれてゐる。それのみか俗惡な人間共をこよなきおく床しい、美しいものにもして呉れてゐる場合が決して尠くない。まことに無くてはならぬしろものでもあるのだ。

若し人生に、裏も表も全く無くして――直情徑行と云ふやつを最も極端に、また最もあけすけに、生地のままで行かせたなら、どんなものであらうか――これには殊更に說明を加へるまでもあるまい――。

だから裏と言ひ、表と言ひ、所詮は人間生活から取除き得ないし又世間と云ふ組織からも除き得ない寧ろ、大切なものでもある。要は善なるものであるか、惡なるものであるか結局人間共の、運用如何に依つて左右されるものであることは疑ふべくもない。

問題の中心は茲でなくてはならぬ。ところで似てはゐる樣であるけれど――蔭日方

となると、人間個々の精神とか、言動とかに現るゝ呼び方で、表裏とは――同工異句とか大同小異とか云つた――ちがひがあり、人個々の場合には、裏表と云ふよりも一層芳しく聞へない言葉であるやうだ。

にも拘はらず、此大東亞戰下に於てさへ裏表の裏の方を、また蔭日方の蔭の方を――換言すれば全るつきり世間若くば人生の表面から見た――裏街道――を往く人間がやつばし跡を絶たないらしいのは困つた者どもである。世の中の諸惡は皆これなのだから、根絶の難いのは先づ首肯し得るとして、戰爭を捷ち拔かねばならぬと云ふ大きな目的に向つて、一億一心總進軍を續けてゐる現下に於て、ちつとも一心になつてゐない分子がありとすれば、これだけ腹立たしい不明朗な、暗い話はない若し見つかつたら何とかして痛めつけてやりたい氣がする。この戰ひつゝある日本國民を暗くするものはやはり闇い――闇――と云ふやつなんだが、これだけ酷い戰爭翼贊の敵はない。曰く敵性行爲、曰く利敵行爲、曰く敵の第五列的行爲――だと、尤なことである。

斯樣な連中に、お前はなんだと問へば言下に、君と同じく日本人だと答へる。現在に於ける君の重大關心事はなにかと問へば、これも言下に米英擊滅――大東亞戰完捷に左ることは決つてゐるではないか。侮辱するなと、怒るに違ひ無いのだから、腹が立つとか、淺間しいとかどころの話でないのである。

大戰も第二年目に入つて「さあ勝ち拔くぞ二年目も」と烈々たる國民の敢闘意識は彌が上にも昂揚されて、より力强い巨歩が蹈み出されて間もない頃、某新聞で見た記事だが、或る部面の特殊な人間は、相當惡る賢く立廻つて○をやり私腹を太らせてゐる。檢察機關の人手不足もあらうし、それに檢擧も所詮は人間の手である以上すき櫛にかけたやうに、普遍的に徹底するとは限らぬ、だから此不德――違法行爲に成功？をしてゐるのが絶無ではなさそうである。この場合人が何をやらうと超然として行ける、道心堅固な潔癖人は別として、凡庸の輩は、うまい手で味をやり儲けたままで濟んでゐるのを見せつけられると――やらぬ者は無能だと感じる――これが遵法精神の破滅原因だと、さらに料理屋の醉客團には、物資關係者等その道の人が多いと云ふこ

とも指摘してあつた。

是を讀んで見て、該當の事實は或る一部分に過ぎぬであらうとは思ひながらも、なるほどこれでは世の中も、人心も闇くなる道理だ、全く然りだ――といふ感じを抱かざるを得なかつた。

全體これが、曩古の大國難を戰ひぬかねばならぬ、君國に報ひねばならぬと云ふ、帝國臣民らしい忠誠心や、日本人的良心を、いや魂を持つてゐる人間の所業であらうか？、と考へて來るとなさけなくなる。

一方――我々國民にかはつて國難に殉んじた、幾多の護國英靈に對しても、戰傷病の勇士達にも、かけがへのない父を、子を、夫を大君の御盾として捧げた遺族達にも、さらに現在、酷熱身を燒くが如き南方戰線に、或は極寒肌を刺し手指をもちぎり奪るやうな北邊の守りに或はまた、海洋上の明け暮れに風浪と鬪ひながら、凡有艱難辛苦に身を曝し只一途、米英擊滅に勇戰奪鬪しつゝある皇軍將兵の勞苦に想ひ至る時、洵に惝然たるものがある。

なんとかして、國民の一人と雖缺くることなく一丸となつて、今日現在、皇國の運命を賭して戰つてゐる、戰爭と云ふものの正しい考へ方に起つて各自の分を果してゆけぬものであらうか？――裏街道を潛行するのも、表街道を正々堂々と正進するのも、所詮は人間個々の性根――魂の問題で、魂の腐つたのは犬も喰はぬ。たまに拾ひ手が來れば刑務所からであるのではまことに困りものである。

改正前の軍隊教育令（陸軍）の綱領の一節に、

「夫レ生ヲ棄テ義ヲ取リ恥ヲ知リ名ヲ惜ミ責任ヲ重ンジ艱苦ニ堪ヘ奮ツテ國難ニ赴キ悅ンデ任務ニ斃ルルハ我ガ國民ノ古來繼承尊重セル大和魂ニシテ……」

と云ふ一文があつた。

――餘談だが改正前と書いたから註記して置く。新教育令ではこんな具體的な、定義めいた文句は除かれた樣に見てゐるが、それは何も間違つてゐたとか、適當でない字句があつたからと云ふのではなく、文字で定義？　を與へなくても日本人は男女の別を問はず生れながらにして、血の中に持つて來てゐるから――と云ふ理由からでは

あるまいか、斯様に考へてゐる。固より私の見解に過ぎないが――。

で、もとに反つて――此一文こそ言はば、大和魂の定義とも言へるものだと思ふし、また軍隊教育令だからとて何も帝國の軍人のみに限つたものでなく正に是精神――魂こそ、凡そ日本人たるものに缺ぐべからざる、必須の資性たるべき筈のものである。畢竟この重大なる超々非常時局下に、闇行爲をやる人達にはこの大和魂が缺けてゐると見るの外はないのであるが――いや大和魂は持ち合せてゐるぞつと、目をむいてふんがいして見た所で、少くも「恥ヲ知リ名ヲ惜ミ……艱苦ニ堪ヘ……」の條件に缺ぐることは否み難からう。すると完全なる日本人らしい資格者ではあり得ない。先づブキテマ高地に白旗を掲げてのこ〳〵やつて來た連中以下か、とにかくそれ以上のものではあり得ない――こんな性根や、思想は早く本家の米英あたりへ還して呉れと叫びたい――。

就中――遊興税をかさませる――お茶屋方面の最肩筋に至つては、社交だとか、商談だとか、氣保養だとか、或は素見の行き過ぎだとか、それ〴〵事由はあらうが全面的にはゆるせない問題である。なるほど他から差止める筋もなければ、法の力でどうしようと云ふのでもないが、戰時下國民としての道義觀に愬へて大いに自肅すべきである。特に新聞の聲にも聞きしが如く、闇――酒色――如何にも形影相伴ふ部類のものであり、臭いとの疑惑も當然起り勝ちな問題である。ところへ或る新聞にて「――根本は、東京、大阪を首めどこでも宴會が多過ぎる、自肅がない」と云ふ警世の聲を聞いた。宴會と云へば私的な遊興とは多少趣きはちがうけれど、遊興税附の場合が多いに違ひない。それにしても之等が皆――闇附――であるとも思はぬが其の孰れにしても、出來得べくんば自肅して行つた方が良いに決つてゐる。

賀屋藏相の發表にもあつた通り、遊興税が依然舊態の儘なり――と云ふ程度ならばまだしも、增加の傾向にあるらしい口吻であつた――のが氣になつてならぬ。遊興税が直接敵國へ遁げ込んで行く筈はないが、國家歳入の道順を直接、貯金なり、公債購入なり、國防献金にでもしたらどんなものであらう、確かに好いはづである。

と云ふのは、遊興税には遊興税となるまでの道程に於て、それが闇的な商談ならず

とも、反時局的な何ものかが附隨して行くからである。遊興の徒？　に悉くとは、元より言へないが先づその多くの者に於て、現在戰爭しつつある國民としての心構の上に、虧る所があるか、少くも戰時下國民としての良心に反するものゝあることは、否定し得まいし、いづれにしても戰ふ國民としての健全性は認められない――結局目視にも手にも捉へ難い一種の利敵行爲と斷ずべきで――これでは一億一心が泣きそうである。

だから遊興の徒よ、我が儘か、氣保養のためか知らぬが、何も一から十まで反時局的行爲だと抑へつけるのではない――自分の金で遊ぶのに文句はあるまいなどと、口を尖らす前に一應手を胸に當て稽へて見るが良い――昂然の氣を養ふのか、或は密議を凝すのか其の何れにしても、一夕醉客としての意慾を滿すべく、貴重なる飲食と、時――實は戰費と闘ひ拔く時間とである――を消費する間にも、忠誠勇武なる皇軍將兵の幾人かは、奮つて國難に赴き悅んで任務に斃れつゝあるのですぞ、尊い血を以て御奉公しつゝあるのですぞ――これを篤りと想ひ見るならば、立ち所に自肅すべき事も、愼むべきことも判らうし、分別もつくであらう――。

――闇と言ひ、遊興と言ひ――所詮は日本人らしい本然性を正しく、表――で蹈みぬくか、陰慘な、裏――で往くか、良心――魂の持ち方一つである。大戰も第二年目に入つて國內戰線何れの部面も、一段氣合の入り方が凄味を帶びて來たのは當然で、誰の顏を見ても殺氣立つた樣な眞劍さである。

とくに、生產戰士達は愈々一九の火の玉となり、何人が叫びかけたのか、或は自發的なのかも知れぬ、年末年始は元旦一日間を除いては、無缺勤敢闘豪華記錄を打ち立つべく誓約し、之を實行しぬいて來た、其の他の事例も一々言擧げする迄もあるまい。

かうして只一途に、米英擊滅、米英擊滅への國民の意氣は暮れせまる昭和十七年と云ふ歲末から步並を微塵もみださず力强く押し進んで來た狀は、宛然連日連夜敵を追擊する行軍部隊が、なんで長蛇を逸してなるものかと、捕捉の好機も愈々高潮化してゆき、晝夜の別なく人も馬も、飮まず喰はず、道が嶮しからうが無からうが、肩の疼きも、靴擦の痛みもそんな事は念頭にない、只一塊々々の肉のかたまりの集團が、敵

を捉へやう撃滅してやらうの意識一念、それこそ靴の踵も、蹄鐵も、車輛の心棒も、摺り切らさんばかりに追て、追て喰ひ縋つて往く時の、あの神々しい姿にも見へる——。如何程のトーチカ心組も、これが眼にも映らず心臓にも響かぬ道理はない筈だが——。

正月が近くなつたからでもあらうか、物資の横流れがあるとか、生活用品の買出し買ひあさりが横行する氣配があるとか、斷乎たる態度を以て臨むと云ふ當局の注意を聞いた事もあつた。轉ばぬさきの豫防杖に終つたならば幸ひ、事實存在したとすれば遺憾此上もない、容せない問題だ。

乏しきを憂へぬのは國民の常識でなくてはならぬ。等しきを希ふ心に、等しからざる慾望の混入は——協力——の混亂乎、——總進軍の亂調——でしかない。協力の混亂、總進軍の亂調が如何なる結果になるかは言はずとも明かであり、敵國の狙ふ思想謀略もこれである。だから乏しきを、とぼしきとする不平不滿の聲も、闇行爲も利敵言動であり、敵性行爲たるに間違ひはない。心の中に米英から巣喰はれた人間は一人もあつてはならぬ。これを撃滅せぬことには一億一心體制は成り立たぬ。これも結局は——魂——の問題だ。理窟を知らぬ人間——國民は無いのだから——。

大戰二年目もいよ〳〵暮にせまつた或る夜、街の知人がやつて來た。要談も終つてから火鉢の火をたのしみながら雜談が出たが、今日は甚だ申譯のない事をしましてと、微苦笑してゐた。事情を訊ねて見ると、土木建築請負業と云ふ家業柄、數十名の若い者に心ばかりの賞與金をそれ〴〵渡してやつた所が、親方に無斷で各自三圓割の忘年會を目論見、準備も整ひ一同の顏も揃つた所で、親方にも喜んで貰ふつもりで、一寸軀を借してほしいと使ひが來た。行くまいと思ふたが、行かん事には埒があかぬので乘込んでゆき逆に挨拶した——お前達を叱るのじやない敎へてやるのだ、今頃こんな忘年會などの流行ぬのは知つてゐるだらう、此月は公債も買ふ月だつたな、俺の出した賞與は少くはあつたが何んの目的で出したかも判つてゐるなあ、別に云ふ事はないから皆歸れ、併し此の儘ではこの家が迷惑するから肴だけ喰ふてから引揚やう——と酒一滴なしで腹だけは太らせてからおひらき、それで肴代の一枚は、わたしが一人で

今日忘年會をやつた理けで、若い者はやつぱり側から氣をつけてやらぬと間違ひが出來て危ふありますよ、と語り終つて笑ひながら座を立つて去つた。

玄關に入つてゐた其の日の夕刊を座に戻つてから見ると全南岩崎生と稱する人の、宴會廢止論が載せられてゐた。某縣知事の宴會制限令は良いが、已むを得ざる宴會とあるのは少々手温し、支那事變以後の今日までの分は已むを得た宴會をやつたのか、名目はどうにでもなるものだ、華府入場式迄は全廢すべきだと云ふ論旨の樣であつた。

某知事の制限令は出さぬのよりは時局的であるし、岩崎氏のは更に其の上を行つてゐると思つたが――此上の批判は避ける事にして、前の請負業氏の場合とを彼是聯想すると、興味ある問題が湧いて來る。

――何程、博識多才で認識が深いからとて、裏も行く、蔭も潜行する、良心的な自制も足りない人々がある――。かと思ふと、是の請負業氏の如く大した學歴も閲歴もない、街の物識だ有志だと言はれた人物でも無いが、やる事、なす事が克く時局の線に副ふて、何等の技巧も、何等の扮飾も、なんの術ひも、なんの理窟も無く驀である。

つまりひたむきな――至誠と情熱――が迸り溢れてゐるのは、どうした事か。

これが茲、數年前までの昔であつたならば「奴さん單純だからよ」で一遍に嗤ひつぶされた事であつたかも知れぬ。たとへば小説最上德内に出て來る、アイヌのイコトイ一統が、命懸で最上の北地探檢を援け大業を成さしめたと云ふあの、純情一筋道を想はせるやうな――。

されど、日本の國民精神なるものが、歴史的幾多の試練を經て來た上に、さらにこの大東亞戰爭に依つて鍛錬され、研磨された結果、文永――弘安の大國難に於てすら見られなかつた程の、絢爛たる大光輝を發して來た現在に於ては、それは言ひ度ない、また言はれない言葉である。――なにほど頭腦が複雜で良いからとて、識り過ぎる程識りながら――反時局的な行動があつて良い理けはない――だから眞々乎の「日本人」は、身分の高下や、識の深淺や、生業の貴賤に因つて決るものではなく結局、人のたましいの問題で、これの腐つたのはなんともはや、濟度されやうがないのではあるまいか。

★

想ひ起されるのは、大戰二年目の十二月、第八十一帝國議會開院式の日の感激である。

畏くも優渥なる勅語の中に「億兆一心益々國力ヲ增强シ敵國ノ非望ヲ破碎スヘシ」との異例の詔示を賜つた、當時の恐懼感激は深く、我々國民の胸底に烙きつけられ、夢寢も忘れることが出來ない。更に同議會第二日に於ては、一億國民の肚裏を東條首相が代つて絶叫した、曰く「戰時意識に徹せよ、生優しいことでは及ばないぞ」と。これも今尙耳朶に新しくこびりついてゐる。

爾來、南北の戰線も日々凄慘苛烈を加へ、眞の決戰容相を深刻ならしめて來た。ガタルカナル島に於ける連續半歲を越へた血戰死鬪、或は山本元帥の壯烈なる戰死、またはアッツ島に於ける山崎部隊の玉碎等々、更に我が國民の上には一層酷烈なる大試錬が加へられるであらうことを覺悟せねばならぬ。又第八十二臨時決戰議會に於ける擧國的眞劍なる感激調も茲に、再言を要しないが、斯程本大戰の本質の竝々ならぬ樣相とをつきつけられても、尙五臟六腑に泌み渉らぬ者ありとすれば餘程、日本人ばなれのした人間共と云はねばならぬ。況んやなほ此の上營利の奴隷、私慾の權化、○情の囚となる樣な人間に於てをやである。

或る評論家は、此の決戰下に於て尙反省の出來ない程、性根の鈍麻した人間に其の「魂に愬へる」と云ふやうな出方は手緩くて効果はない。宜しく「お茶屋、料理屋は閉塞せよ、反時局的人間には或る程度の體刑で臨め」と論じてゐた。尤なことである。併し體刑の痛さも、辛さも所詮は痲痺した人の魂を呼び醒さんとするに外ならない——苟も大戰下の日本國民だ、牛にはなりきれない——。

★

——最早、理窟もなにも要るものではない。また今日理窟を知らぬ國民は一人もないはづだ——そこで、識りながら、辨へながら裏に潛り、蔭に潛む——やうな日本人的良心の缺除した「魂」のくさつた人間が、一人でもある間は力のない決戰態勢であり、一人あまさず本當の「淸い魂」に還りきつた時が完全に——米英に最後の止めを

刺す時だ――。

★

この隨想に、強いて結論を望むならば、ただこれだけだ――。

五翼壯の活動

（一）

聊か古めかしい詮索のやうであつて、實は新しいもの丶一つであると思ふが一應各地翼壯の活動狀況を檢討して觀るのも、決して徒事ではなからう。これが模範的な一つの型だ、と云ふのはなか〳〵見つからなかつた。と云つても全部拙い、惡いと謂ふのではない、何からやるか、どれにしやうかと云つた、進退行動に迷ふといつた態のが多かつた。

固より全部と云ふのではないが、併しこれは發足早々の昭和十六年暮から、十七年夏の頃にかけての狀況で、最近に於ては大いに面目を改めて來てゐるのは實事である。

元來下部に於て、最國民に直接親炙面の多い推進員だとか、壯年團員とか云ふ實際に働くべき人々に課せられた任努なるものは、一見明瞭ならしめんとする箇條書もないではないが、實は一見は百見でも盡し切れぬ程の、廣さと、深味を持つてゐる結局は、簡にして要を得せしめ樣とはするが、時代——時局の要求する所極めて重且大なるが故に、數行の名句名言？　でつくしきれる筈もない、是はひとり此團體に限らない、社會構成の複雜化はあらゆる結社團體に對しても、斯くなるのが必然である、だから所詮はそれが鄕軍であれ、壯年團であれ、產業報國會であれ、青年隊であれ、各々其の特質、使命に基く主要要綱の他は、皇國民としての道義的觀念表現を以つて、判らせるより手はなくなつて來るのは當然である。

だから或る點までは明確であり、或る部分からさきは最早相通じたものになつて來る。その窮極は一個の「皇國の民」として任務を果せと言ふ事に詮じつめられて來る。それであるから物は取りやうでもある。抽象的な二—三行の條項だけでも要を足し得ることもあるし、其の上をどう解釋するか、何處まで眞面目に實行に移すか、實踐するか、もとより重點主義で行くには行くのであるが、其處がなか〳〵難しい問題である。これがもう何年間かの實跡を經驗させ、實行上の軌範と云ふものが築かれてゐるのならば兎も角——そう凝ることは要らぬよ。そこが運營の妙だ、運用の要訣だよ——などとも言へない時期であつた。

併し何れにしても當局の要求――當局の要求といふよりも支那事變以後に於ける、帝國内外の情勢が斯の如き團體を、産ませたのであつて其の點から觀ても、課せられた使命が尋常一様のものではあり得ない。

（二）

これは或る縣で聞いた事例だが、先づ壯年團員適格者として勸誘したら快諾を與へた。數日後入團金を徵收に行つた所が、彼氏曰く、入團させて戴いたのだからと、心よく出したが、そこで遽かに更つて、一體壯年團とは如何なる事をするのかとの質問を發したと云ふ話があつた。ちよつとおかしくも取れるが、當人にして見れば眞劍だつたのである。確かにその任務といふものに對しては、かなり廣汎で且重大なものである事だけは、概念的に心得てはゐたらうが、さて愈々となると多少の不安があつたのであらう。恐らく此人物は、入團してさへ置けばもうこちらのものだなどとたかを括つてゐる部類の人達と違つて責任觀念も旺盛な、頼みになる人物であつたらうと思ふ。

それよりも茲に今頃と云ふやうな感じもするが、大政翼賛會の實踐團體である翼壯に課せられてゐる責務は、それほど簡單に口に語り一―二行の文書で盡せる様な單純なものでない事を認識すると共に、指揮機關の强力適切なる指導統制下に、如何なる途を選び之を實行するか、如何なる範圍、如何なる程度に活動すべきか、その指標を明確に摑むべきであり、また壯年團員適格者と認められた、其の人に存することも睹り肚に納めて置くべきであらう。從つて其の實踐部面の多岐複雜なる、亦當然である。

睹渉した處、甚だ積極活潑なのもあり、靜觀的なのもあり、ぐつと下つて辛うじて自ら其の存在をつないでゐるのもあり、寔に多様多彩であつたが――最初述べたやうに、概して心は焦れど職場見つからず、と云つた氣配が、かなり眼についていた。固より一般的の所見であるが――。併しちつとも焦つてはゐないこれで得たり賢しで滿足しきつてゐると云ふ團體もあつたのであらう――が。

問題はこれである。そうあせる必要はなかつたやうに思ふ。一々壯年團までが手出

しをせぬと濟まされぬ程の問題が在つては大變である。寧ろ焦つたり、こせついたりせぬ方が良いのではないかとも考へらるゝ。

銅鐵の回收だとか、防空服裝の矯正だとか、蓖蔴の栽培だとか、やれ交通整理だとか、戰時下の要請に直接關係ある表仕事も相當にあつた。

或る所では青少年の詩吟の指導をやつたりされたり、溝渫への手傳ひをしたりして、壯年團はもつと外にやる仕事はないのかと皮肉られた話を聞いた事もある。斯うした部類の話は尠くなかつたが、今日の革新若返り體制を必要とする現下の狀勢に於ては、退嬰的で、老猫の樣に引つこんでゐるのよりは、遙に優しである。

但しやみくもなく焦つて派手な仕事を漁り廻る必要はない。必要が無いではない或る場合は却つて惡結果を齎らす事もある。或る頃一部の聲ではあつたが妙な事も耳にしてゐる。

壯年團は、或る二―三の既存團體と、團體を異にすることは明瞭だが、團員其のものは一人數役を演ずる結果、其の出所進退に混肴撞著を來してゐて、言はば既存團體の屋上屋――否屋下屋の樣なもので却つて足纏れになる。いつそ解消して既存團體を健實化するのが良くはないか。或は明治以降根强く培はれてゐる、所謂舊思想階層人達は、壯年團は我々の目の上の瘤だとは言はないが――便利屋かなどと惡どい揶揄を浴びせる者もあつた。或はまた、少年隊、青年隊とかう竝べて見て、壯年團はどう違ふのかね、などと皮肉と、とぼけを一緒にした酷問を發する人もあつた。

ともあれ、斯樣な雜多な意見や、批判を聽くことは止むを得ない事であつたらう。

昭和十七年もあと二―三ヶ月といふ時期になつてからでも、市、町、村會議員の改選に當つて壯年團の活動に依り尠からず脅威を感じたらしい非推薦組の中に、始めて氣付いたかのやうな、眞劍さで全體壯年團と云ふのは、何を主任務とするものかね、どうも俺にも得體の知れぬ存在としか思へぬがと、或る人に訊ねたと云ふ樣な――議員になりたい――人も在つた事實を聞いた程で――世の中は廣いから――これも當分已むを得ない事であつたらう。

（三）

そこで、なにも上述の様な意見や、聲があつたからとて是等に一々耳を傾くるに及ばぬのであるが、兎に角壯年團の進むべき道としては、小人婦女子の仕事のやうに、こせ〳〵せぬが良いのではなからうか、さりとて餘りに尊大らしく、じつくり構へ過ぎて乘り出すべき戰機を逸したり、甚だしく消極化するのではいけないが――。

――問題は壯年團其のものの本質に徹底する事だ。曰く壯年團は最も中正穩健なる「思想團體」であり且國民の「中堅團體」である所に生命と矜持が存する――。

故に絶へず國家内外の狀勢の推移と、民心の動向を達觀洞察し適時、適切有效なる處置と行動を見せねばならぬ。而して一度事に當るや常に大局に順由し、偏せず、緣らず公明を旨とし且世相人心の現實に即したる正しき條理と、鐵の如き團結の力とに依り果斷敢爲克く、正邪曲直を公正直截に糺明是正し以て、國運の生成發展に寄與貢献すべき、團體たるべきである。從て若或る人の言ふが如き、便利屋的仕事がありとするならば、それこそ合間々々の仕事で良い、もつと〳〵壯年團には爲すべき大きな仕事があるはづである。

ところで今日隣組（隣保班）に對する指導援助の如きは、常時不斷的な交渉であるし、あまり目立ちもせぬし、また大きな仕事でもない樣に見ゆるが、これは國民に接觸する唯一の機會でもあり、またその國民生活の各部面を通じ民心の動態をあまさず察知するを得る意味に於て極めて重要なる意義を有し、先づ壯年團の任務中其の半ば以上のものであると言つて決して過言ではあるまい。

其の他は日に、月に變轉生起する事象を捉へ機に臨み變に應じ、對處すべきものであるが、茲に昭和十七年四月實施されたる、總選擧後感を回想して、將來壯年團のゆくべき方向を見出したいと思ふ。

（四）

此總選擧の跡を顧みると、洵に感慨無量なるものがあつた。

銚子一本に、豆腐一丁、酷いのになると十錢、二十錢で節を曲げ濁票を投じたり、偶々眞面目なのがあるかと思へば、唯一回の宣傳？　演說に魅せられての危險投票であつたり、杖に縋つて國民の義務を果すために、投票所に出かけて行くと「此奴だいぶん貰つてゐるな」などと罵言を浴びせられたりしたのは、古い歷史か、新しい歷史か國民のよく知る所である。然して大戰下に於ける、翼賛選擧の成果を見ると眞に隔世の感なき能はざるものがあつた。

是固より、幾多の錯節波亂を經て今日の鞏大をなせる、大政翼賛會——翼政會——壯年團に至るまでが、周到水も漏さぬ强力陣を形成し、積極果敢なる活動を展開し、異常の努力敢闘が繼續された顯著なる功績であつたが、就中國民の上に支那事變以來大東亞戰爭てふ、歷史的一大試練が果せられ勢ひ國民の思想に、政治意識の上にも亦大なる覺醒奮起が促され、上下一丸となつて之に協力せしめたる、時代の力と、偉大なる國民の反省力に依る所が極めて大であつた事を擧げねばならぬ。

が、果して理想的な成果を擧げ得たのであらう歟、これには一應再檢を要する問題が、絶無ではなかつたのである。

違反行爲も、件數は減つてゐたが根絶には至らなかつた。それは當時阿部翼協會長の選擧後の感想言を聞いても、何か晴々せぬものの潜むでゐた事が窺はれた。無論極限された特殊の地方でしかないが、此大戰下に於ても、隣組長をさへ拜み倒しの手を用ひたのがあつて、其の又隣組長が、彼の總選擧前に於てお上のお布令に基き、啓蒙運動辯を一席隣組人にやらされ、大いにてれてゐたと云ふ樣な話も聞いた事がある。これも選擧前の話であるが、今度某氏を入れ當選させて置けば〇〇の配給や、〇〇の出廻りは慥に良くなるからと、逢ふ人毎に宣傳して歩いた特殊人物もあつたとの、巷說を耳にした事もあつた。

最後の日に、其の人物が如何なる人に投票したか、宣傳の效果があつたのか知るよすがもなかつたが、眞に忌むべき己人主義、物質主義、自由思想の殘滓ではあると泣きたくなる樣な氣がした。良しや是が單なる話であらうと、本心でなからうと、又限られた少數の人間であらうと斯くの如き思想が、國內の何處かに燻つてゐるのに間違

ひはないのであるがと、慨歎せざるを得なかつた。

こんな思想の持ち主は、自分一人で持ち續け、あの世に往生すれば、それで事が終るのならば諦めやうもあるが、決してそうでない。周圍の善良人を毒し、さらに多くの青少年達ちにもこれを見せつけて行く、其の結果を想ふとまことに怖るべきものがある。

其の後の市町村會議員選擧に至つては全國的に觀て大いに肅清された事は、認められるが根絶と云ふ事には今一息といふ感じが、まだ遺されてゐたのであるからなかなか安心は出來ない。

併しかうした思想は、ひとり選擧部面のみに見るものでなくして、根本は國民の心に深く喰ひ入り汚毒してゐるのであるからして、ことは頗る面倒な問題になつて來るのである、今日國民の心に巣食ふ米英を撃滅せよ！、米英的自由思想を叩き出せ！、の聲は現下國を擧げての叫びであつて、茲に贅言を要しないから省くが、其處に翼壯の主要任務――大きなる仕事がなければならぬと信ずる。

（五）

抑々壯年團は、前にも述べたるが如く、飽くまで中正穩健なる思想團體であり、從て今更如何なる强力ズムを以て働きかけられやうとも極端なる右、左への變節は容されないし、またさるべき團體ではない、而も青年層の上に位する國家的根幹を成す最も强固なる結合團體で、また其の團員たるや年齢の上からも、思慮分別の上からも、分布狀態や、數的の上から見ても、その健實性と、實行力から云つても、そうざらに類例のある團體ではないのである。

だから、泥渫への手傳ひも良い、詩吟を指導して大いに國民の士氣を昂揚するも良い、其の他以前の青少年團がやつて來た樣な各種の事業をやる事も大いに推奬こそすれ、決して惡いとは言はない、それが翼贊壯年團とは、「如何なる事をすべきや」との質問でも出たとするならば、當然斯うした種類のものも箇條に併列されて來る道理だが、それが「使命如何」或は「主要任務如何」となると、一、何々……二、何々……

…式の答解ではなか〳〵其の急所は衝き難い。其處でどう答ふべきかは暫く措き、凡そ「翼賛」の二字を冠つてゐる「思想團體」たる壯年團の使命と言ふものから考へて來ると、前述の如き仕事は――枝葉末節に屬する――仕事だとしか考へられない、尤他にやるべき仕事もなく手空であつたとか、間接の效果を狙つた補助手段であつたとか云ふこともあるにはあるが――。特に此の一言を挿む所以は、最近に於ける傾向と云ふのではないが大體昭和十六年の末から十七年の夏の頃の所見に徵すると、何かぱつとした派手な仕事をして見たい、見せたい、と云つた樣な空氣が何處にも見られた。勃頭にも述べた通りであるが今頃は殆ど見られなくなつた。それでも時によると新しい團員や、幹部の中には、ともすると斯うした末梢的部分に走るのを見られぬでもないからである、だから繰返して言ふ、何も焦つて便利屋化しては却つて良くないのではないかと。

ものの例へだが、薄化粧をしてエプロンがけで、お茶汲みに出て呉れたり、何々會とか稱する文字入りの幟りを押し立てゝ驛頭あたりへ長蛇の列で繰出して來る團體などとは、全然其の本質を異にする事を認識せねばならぬ。而も此點は獨り翼賛壯年團員が自覺するばかりでなく、この團體をして最も有效、適切に而も有機的に活動させようとする國民總ての分野、各層忘くが之を認識し處遇すべきものであると信ずる。

（六）

そこで「壯年團の往くべき方向」に就て檢討して見らねばならぬが、翼賛選擧に於ける各地壯年團の活動は概して目醒しいものがあつた、其の成果も亦初頭に於ける歴史の一頁を飾るに充分であつた、中には彼の總選擧前に於て西部某縣の或る市では、市長の任期滿了に伴ふ改選に際し市議員間に於て、舊態依然たる過去の政黨臭空氣底迷しあるを見てあきたらずとし、活潑なる活動を開始し略決定してゐた市長も御破算となり、若干日時は遲れたが先づ近縣に誇るに足る名市長を獲得して市民を救つたのも有名な話である。其の他にも之に類似した話も一――二聞いてゐた、兎に角胸の透くやうな話であつた。

又壯年團の事業として、指導幹部の講習會とか、みそぎ其の他に依る團員の錬成を中には軍事訓練まで施したのもあつた、こんな風に時局的要求と併行して、錬成に力を用ひた事は全國的な顯著な事實であつて茲に多言を要すまい。

斯樣な理けで、孰れもその活動狀況なり、成果なるものは決して小さいものではないが、そこで過去に於ける壯年團の、働きは何んであつたか？　先づ全國的に是を飜つて考察して見ると其の代表的なものは、

①團體及個人に對する錬成の徹底

②各種選擧に對する啓蒙運動の徹底

大體此二つの樣に見られる、と云つても他には何にもやつてゐないと言ふのでは決してない、なかには相當地方鄕閭の間に目醒しい實際運動を實行して、實績を收めたのもあるが、之を全國的に見る時は極めて稀れで、代表的運動として擧げ得ないのである。尤も事柄が緣の下の力持的地味さもあるが、此點が何う考へても壯年團の爲にうら寂しい感じもせないではなかつた。

——で、これを約言すると、何處の壯年團も運動としては選擧啓蒙運動と錬成を主としてやつて來たのだ——と言へるのではなかつたらうか。

そこで錬成は、實際運動への準備訓練であつたのだから、こんどは錬成の域を超越して眞使命に基く實際運動に、猛然突入して往くべきで、これが問題の中樞なのである。甚だ思はせぶりの樣であるがここまで、詮じつめて來ぬと條理が立つて來ぬからである。一體他の團體や國民は今日の壯年團を何う觀てゐるであらうか？、又翼賛指導人はこれからどう指導してゆくつもりであらうか？、それともこのままでひきずつて行く心算であらうか？、これを判決的に代辯すると、

（一）國民の場合は

壯年團は選擧の度に、或は國民の生活面までも立入つて、往年の顏役のやうな仕事だけをやつてゐる樣だがあれで良いのか、何かもつと實際的實踐運動はないのであらうか？。

（二）翼賛指導者の場合は

概して從來は、錬成に依て信念、理念の植付けに終始して來たが、此儘では行けない將に龍頭より蛇尾への變換期に直面して來てゐる、今度こそは實踐――實踐運動へ、いきなり飛込んで往くやうな積極的、萬全策を取らねばならぬと、氣付いて行つた、否寧ろ焦燥氣味でゐる氣配もあつた――これは翼壯團自體も、既に自覺してゐる所である。

（七）

抑々、翼壯が確然たる思想團體である以上、實際の運動となれば團體の名に於て其の結集力を以て活動すべきは當然であり、翼壯としての使命も面目も是に在ると信ずるが、團體としての行動の前に、先づ翼壯團員個人としての實踐德目が完璧されて始めて、壯年團としての團體運動が光彩を發し、物を言ふのではなからうか、從つて壯年團員個人の粒の錬成向上は、翼壯機構中の細胞として訓致され、翼壯と云ふ背景に依て國民の前に於ける指導力と、實踐力が養はれ、團體的威力が附與される――これを總括的に例へて謂ふと、孜々として倦まざる軍人精神教育と、戰技訓練とに依り完成されたる帝國軍人個々の集團が、所謂訓練精到なる軍隊となり、其の軍隊が一方面の作戰部署を擔任し茲に偉大なる戰鬪威力を發揮するに至るのと、何等渝る所はないのではあるまいか。

かるが故に、若し翼壯團員にして、團體として運動戰線に立つ時のみが翼壯團員としての戰場だと、考へるやうな思想があるとするならば最早仕事も、働き場も狹まれ極めて窮屈なものになつて來るのが當然である、曾て「脚を括つて置いて飛べと云つた樣な上の方の方針だから我々は何もされない」とこぼしてゐるのを聞いた事もあつた、多少そうした掣肘も邪魔にはなつたらうが、一面前敍の樣な偏狹な解釋が禍ひして、自ら往く道を阻んでゐる嫌ひも絶無ではなかつたやうに思ふ。

神武日本軍の戰鬪威力を、戰場直感で探つて見れば結局は、散兵線中にある一兵が一兵としての自己の全能全力を盡して責任を果すに在つて其の總和力が、部隊全體の戰鬪威力となつて發揮されるのである事に想ひ到らば――道は團員個々の「實踐」に

在り――と謂ふ極めて、幾き所に見出さなければならぬ問題だと考へられる――だから何をかやらむとする時、我々は翼賛壯年團だと、矜大ぶる前に先づ我々は翼壯團員だと云ふ、矜持と自負を基底として進退行動の萬事を決すべきだと思ふ――それは宛然も軍人が「我々は帝國の軍人だ、股肱の臣だ」との矜持と自負心を堅持し、身を律するに常に五ヶ條の御聖諭を秋霜の如く奉體實踐する、あの心構へと同樣であつて慾しい――即ち人事萬行の基を爲すものは、元々この個々の人に發することを思ひ知るべきである――。

（八）

贅言の餘地も大分收縮されて來た。先づ團員の自己錬成が成り、個々の自覺自奮に依る實踐に透徹して來たならば、殆ど勝負ありと言つてよからう。

但だ、「個々の實踐透徹」――これは言ふは易く、實行は甚だ難いのである、國民の期待の大きい所以も實は茲に存する――。

團員は、團として實際運動をやる時、翼本の指令又は團幹部の指揮に依て動く時のみが壯年團員であつては、實際の御奉公なり、仕事は成り立たぬ。

斯くあつたればこそ「壯年團は顏役か？」「直截率直に言ふ、團と云ふものを背景に行動する時のみが國家的有爲な中堅人であつて、一度個人として行動する時は、只の街や、村の人ならまだしも、虎息子であつては到底翼賛の二字を冠しては語られない。だから、今度團は何をするだらうか、如何なる運動をやるのだらうか――などと團としての行動を詮議立てする一歩前に、先づ團員各自の言行を吟味して、衆の範たる事を心懸けねばならぬ――曰く、團員各自の私生活にまで翼賛精神を滲透させ、眞の躬行實踐人たることを先づ以て先決とせなければならない、――これは分りきつた問題のやうだが、さて何處まで實踐されてゐるかとなると、無條件保證は未だしではなからうか――。

團としての運動の企劃及實施は、總じて翼賛指揮機關に委せ其の指圖を忠實に服行すれば足る。その一歩前に先づ團員個々の往くべき道を確立してかかるべきである、

抑々適格者として白羽の矢が立てられて、團員たりし時の覺悟の中に既にこれらば含まれてゐた筈ではなかつたか。

と云つても、團員の私行や生活態度が何うであつたとかいふのではない――觀た所團と云ふ背景に頼り過ぎて、手近く團員として自ら行ふべき事に消極的で――往く道に迷ふ――といふ傾向を認めるからである。

重ねて言ふ、團の名に於てやる運動のみが決して翼壯の仕事ではないのである、翼賛人としての責任と自覺と立場に於て、行住坐臥、四六時中相接する隣人の一人、ひとりに、翼賛意識を吹き込んでゆく事それ自體が、翼壯の仕事であり、運動であり、この團員個々の翼賛運動が根基をなして遂次擴充普遍化され、團體運動の目的にも到達し、實績ともなるものであることを深く銘心すべきである。

――これが卽ち次期の「直に實踐運動に飛込む」捷徑(ちかみち)であり鍵であると信ずる――。

結局、壯年團の往く道は――團員が積極自主的に國民の陣頭に立ち、徹底したる垂範實踐に依り國民をして、戰ふ日本人としての決戰意識に燃え熾らせ、實踐に眞劍忠實ならしむる、個人翼賛を基底とし遂次之を擴充高度化し團體的運動威力の發揚に挺身參與し、以て綜合成果の獲得に邁往するを要す、而して之れが活動の根底を致すものは一に團員各自の烈々たる熱誠心と、旺盛なる翼賛意識に在り――と確信するものである。

これを、ひらたく言へば翼壯の仕事は――後ろ鉢巻をして、腕章を附けた時ばかりでなく、家庭に於て、職場に於て、衆人に接する場合に於て凡有平常の生活の中に、多く存在してゐる。而もこれが大本(おおもと)を致すものである――と謂ふのである。

(九)

かるが故に、(四)、(六)に於ても述べたが、選擧期節に於ける翼壯の活動は、大いに見るべきものがあつたのであるが決して理想的なものではないのである、といふの

はあの筆法で、選擧と云ふ聲を聞くと、遽に起ち上つて大いに啓蒙に努める、一本ねぎ込んでも見る、洵に結構であるが、一戰終ると直ぐ熱を下げる。蓖蔴を栽培させよと達しが出ると、その當座だけ勸說是れつとむるが、各家庭が植ゑたか、生へたか、育てゐるかそこまでは親切が屆かない。交通週間が來るとぱつと飛出して熱を昂げるが週間の終つた後はけろりとしてゐる、中には自らも一般交通違反者に後戻りする。斯樣なやり方はばつと眼につくから、一應の宣傳にはなるが實のない働きのないものに終るのは必定である。これでは到底世の中の裏面諸相と取組をして、根氣くらべで之を匡正せねばならぬ翼贊運動にはなりかねる。

故に翼壯の往く道も、働きも實は各自平常の生活の中に存在すると言ふ所以はここにある。熱と根氣の連續が翼贊運動であるから——。

(十)

然らば、平素の生活中に見出すべき仕事とは何か?——蛇足の樣であるが、これも抽象的觀念論で逃げたのでは捉へ所がなくなるから、二つの例を擧げておかう——。

(一) 啓蒙運動(選擧に限らず世事百般を含む意味に解釋したい)は平常國民に對して正しい政治常識や、徹底した道義觀を植付けて置けば特別な運動を實施せなくとも、自然に解消さるべき問題である。對象は國民の各層を通じて指導しておかねばならぬ、敎學方面のみには賴つてゐられない、況んや縱へ有識者や指導階級人であつても獨善的に納つてゐる舊體制人には尙更委せきれない——補ふに、國民思想の核心である翼贊人の努力に俟たねばならぬ。

國體觀念、日本精神、國民道德、皇民意識、戰爭觀等、凡百(ぼんひやく)の事柄は皆これである。——是を平常時を選ばず國民に徹底させて置けば、(二)(三)(四)に述べた總選擧後感に出て來るやうな、怪奇現象は當然その跡を絕つことも疑ひなからう——。

(二) 決戰下に於ける日本人をして如何に戰ひ拔かしむるか——曰く生產增强、戰時國家經濟の確立、戰時食糧の增產、物資統制の確立、國內防衛必勝態勢の完整

國內思想戰、健兵健民運動、國策輸送等々凡有大戰完捷要素の全部門に亘り――直接間接に指導翼賛せねばならぬ問題が、眼前に甚だ多く横たはつてゐる。みな國民相互の生活の中に――である。

――要は、翼壯と稱する健全無比の思想的結合團體の中に、尊い自己の存在を瞭きりと見出して、不撓不屈、凡有機會を捉へ團員の一人、一人が率先躬行、以て國民の一人々々を翼賛道の軌道に、引き摺り込んでゆくべきである、凡有機會とは講堂教育や、道場錬成を意味しない、日常の生活を通じて行ふ垂範實踐による個々の翼賛運動の謂ひである、斯の如くして始めて國民思想の中堅ともなり、胎動とも成り得るであらう――。

時には翼壯の行き過ぎだとか、反對に翼壯健在なりやなどの豫期せざる世評を聽く事もあるであらうが、自若として甘受すべきである、元來思想結社とか、團體と稱するものは、けば〳〵しく表面化させず、所謂緣の下の力持ちに終始しながら其の間に陰然たる、實績を收むる所に面目があり特質があるはづである。といふのも翼壯の實際運動――固より悉くではない――が、團員個々の平常不斷の活動成果が累積し遂次、翼壯團としての運動形態へ擴充化されるのが、理想に近い自然のゆき方ではあるまいかと信ぜらるゝに於て、何も彼も仰々しい派手さがざらにありやうはない、おそらく然樣な事を氣にやむ團員もなからうが、そこが所謂翼賛人のつらいところである、若し萬一斯樣な線の小いさい事を考へてゐるとすれば、到底肚に耐へのある大事は成し難いであらう。

偖て此緣の下の力持ち的な、運動の目標を、重點を何う選ぶか、是は重要な問題であるから一應明かにして置きたい。

先づ現下に於ける當面の最大目標は――大戰完勝――に在ることは言ふまでもないが、なほ此の他に、翼賛人最大の目標重點として擧ぐべきものが當然なくてはならぬ――即ち大東亞戰爭も茲に第二年目に入り、眞に皇國の興廢を賭して戰ひつゝある血戰下の今日、尙燒燼しきれず燻りかへつてゐる日本の敵、國內の癌たる米英的、唯物的、己人主義的、自由思想の殘滓がこれである、是が擊滅こそ正しく刻下

喫緊の要務であつて、先づこれが翼賛戰線に於ける戰鬪威力の指向重點でなければならぬ。

此の擊滅拂拭が成らば、國民の戰爭意識の高揚も、戰力增强も、敵愾心の强化も、國民思想の明朗健全化も、民心の把握結集も――――嚮ては大戰完捷へ――――と萬事を解決に導くであらう。

宜しく國民思想の胎盤たる翼賛人は、この眼に見へざる敵の排除殲滅に、異常の勇猛心と熱意とを以て全力を傾倒し、驀直行前すべきである。

これが先づ、翼壯の直面する最大の敵であり目標である、同時にまた翼賛運動終極の大眼目でなければならぬ。

正に――――翼壯の戰鬪目標――――は國内の村閭市井の巷間至る所に潜在し、執拗巧妙に其の餘喘的蠢動を續けつつある、「自由思想」の擊滅に在りと斷ずることが出來やう。

（十一）

かなり、翼壯團員個人の平素に於ける實踐躬行、陣頭運動を强調したが、何んと云つても翼壯團といふものが母體であり、後楯である以上團員個々の擅斷的自由行動は、斷じて許さるべきでない、其處で團自體の結策と云ふものが大いに重大なものである事は當然である。

そこで之に就ては或る席上で話されたと云ふ、翼本の某幹事の言を藉りて參考に資したい。

「これまでの翼壯運動は、どちらかと云ふと一種の顔役的、名譽職的運動に過ぎなかつた、團員だから或は役員であるから新體制を唱へると云つた樣な御都合主義では、到底今後の實踐運動を持つて行く事は出來ない。團員はここで聢り覺悟を固め、苟くも次郎長一家や、國定忠次一家の結合にも劣る樣なことのないやうに、强靱なる結合統制の下に、眞に御民われの勇氣を發揮して實際運動に挺身せねばならぬ云々。」と、

斯樣な意味を强調したと聞いたが、何人もこれは洵に我が意を得たと云ふ感じのする至言であり、要請であるから何等批評を加ふるまでもあるまい。

（十二）

最後に、附け加へたい――。

翼賛人としての翼壯團員自身は、今頃自分達の前途に對して、何んな考へを持つてゐるであらうか?、　もとより人によつて違ふことは當然であるが。忌憚なく言へば發足當初の希望は頗る大きかつた、大きかつた割合に、滿足しきれない何かあき足らぬものの連續であつた、これはなんとかせねば此の儘ではいけないと、ひそかに期する所があるか、それとも大體此の附近で甘んずるほか手はないと、一種の諦觀に蹈止つてゐるか、若そうであるとすれば、洵になげかはしい問題である。――前者は後者にまさつてゐるが――今からそんな無氣力、無熱であつてはなるまい。まことに奥齒に物の挾つた様な言ひ現しかただが、實は一部ではあるけれど斯様な氣配の團體を見てゐるからの事である。

凡そ大事業を成さむとするに當つて、困難障碍は大底の場合つきものである、無難にすら〳〵つと行つたならば無意味に反復する遊戯に等しく倦怠をこそ生ずる、でなければ奇跡の外は望み得まい。

じつくり考へ直すことだ、翼壯に發展性がありや、なき哉、こんな事を考へて見るだけでも愚かな話ではあるまいか。

雄渾なる國運を賭けての決戰を「戰ひ拔く日本」の指導者であり、翼賛せしむるのが翼壯の任務である、前途に希望があるとか、ないとか土臺的に持ち出す必要のない問題で、洵に前途に洋々たる希望が耀き切つてゐる。

今其の翼壯に對する、國民の輿論の一斑を記して感奮興起を促したい。

「敢へて決戰下の深刻さは説明を要しない、國民は擧げてこの深刻さや、嚴しさに齒を喰ひしばつて起ち上つてゐるのである、就中國民の中核であり、國民運動の指導者たる翼壯團員には、一層この深刻な、嚴しい戰線に挺身蹶起して慾しい。

而もこの場合、過去に於ける理念論、觀念論に浮き上つた傾きのあるのを斷然揚棄して、押し逼つた決戰下と云ふ、現實の狀勢に即して眞の翼賛的實際運動に――力强

い突入を――要望すると。」

洵に國民も眞劍である、其の叫びにも眞に切實なるものがあり傾聽に値ひするものがある。何をおいても翼壯團員は、闘ふ將兵の心を心として、躬を以て實踐範を垂れ國民の輿望に應ふべき秋である。

――これがまた、眞の臣節を全うする道でもある――。

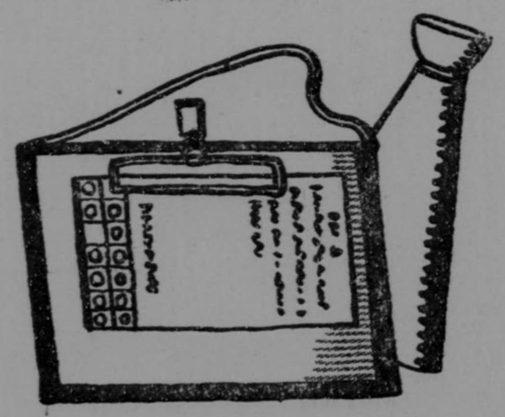
更に第八十一議會をめぐり、翼賛會は弱體だとか、翼政を改造せよとか、選擧の推薦制を廢せよとかの聲を頻りに聞いた、その論據に就ては茲に詮じ詰めて見る必要はあるまい。がなにか知ら、翼壯系の人々は選擧の時期になると必ず顏を出す、親分的な存在で他に取柄はないと云ふやうな印象を與へた事に因るのではなからうか、翼壯の眞の働きや肚がまだ分つてくれぬと云ふ樣な感じがせぬでもない――。

だからくどいやうだが云つて置きたい、翼賛人――翼壯は、皇國臣道の凡有面の實踐を、躬を以て地で行き國民を啓蒙指導する事を本然の使命とする。選擧前後に顏を出したからとて干渉の爲であるべき筈はない、啓蒙指導のためだ、啓蒙運動は翼壯の主任務だ。

かるが故に啓蒙運動が、行き過ぎて選擧の干渉にまで走つたならば、當然國民から擧げ脚を取られる事になる。

而して、啓蒙とは國民戰時生活の凡有部面に亘つて、實踐垂範による指導を謂ふのであつて、宛然も選擧時期のみを翼壯の書入れどきの如く見ることは大なる錯誤である。飽くまでも翼壯の活動は團員各自が躬を以てする、常住坐臥年中無休の陣頭垂範活動の、連續でなければならぬ。それほど尊く、重い働き甲斐のある、翼賛的役割を負荷するものであり、これが即ち翼賛壯年團の「眞の姿」でなければならぬ。

六　隣組の母



その日も好い秋日和であつた。而も大詔奉戴日であつたし朝から、言ひ知れぬ感激と、力强さと、明朗感に一日を浸り通した私は、洵に晴々した氣持で會社から歸つて來た。

今年三つになる長男坊の哲昌が、大通りに出て遊んでゐたらしいが、もう遠くから私の姿をめつけ出して、頻りにおかへりなさい——手招き——をしながら、よち〳〵とやつて來る、後ろの方から家内も附き添ふてゐた。行き遭ふと坊やは兩手をひろげて飛び付くやうにだつこをせがむ、私はいつもの樣に鞄を家内に渡して高々と抱き上げてやつた、坊やはよほど嬉しいらしく、私の胸や、肩を叩いて、きやつ〳〵とはしやいでゐた。

秋口からめつきり增た、坊やの體重をはつきり感じて私もたまらなく嬉しかつた。

他所の識らぬおばさんが、坊やと私の顏を見つめながら行きずりした、かろく見送つた家内の顏も、秋の夕日を斜に受けてゐたがやはり大詔奉戴日らしい明るさが見られた。

——私は實は坊やをあやしながらも、ほかのことを考へてゐた、從つて私の方からは、家内に話しかけられなかつた、それかあらぬか家内には坊やを取り上げられたための、手持ちぶさたさが——、あり〳〵と見られた。

併し、ことあげされぬ幸福感が瞭きり讀み取られるし、元氣な坊やの姿と想ひ合せて、私も同じやうに幸福感が一杯だつた、同時にこれが今、食ふか食はれるかの大東亞戰爭下に於ける銃後日本國民の姿なのだが、なんとしたありがたい事であらう……。こんなことを、迷想しながら、玄關前まで來てしまつた。

此の間のびのした雰圍氣は、やつと家内が取り戻して呉れた。

「今日は定期常會日ですわ、きつと吐月先生のお話がありませう……。」

「うん、そうだつたね、じや早く坊やにねんねして貰つて出席しよう。」

「えーそういたしませう、さあ哲ちやんは、おんりしなさいよ、そうして父ちやんと一緒にお風呂に這入るんでせう。」

「ウンー。」

こくりと頷いた坊やは、さつと降りるや、玄關に駈つてゆき格子戸を開けて、鬼の首でも取つたやうな誇り顔をしてゐた。

――入浴、夕餉と一家の早仕まいがされる――。

★

私の隣組ではどの家庭も二人、三人と連れ達つて、常會に出來するのが常だが、時間勵行も――午後七時寄りは確實に行はれ――見事なものである。

實はこれにはちやんとした理由があつて、自然に斯く訓練されたのである。

大體Mさんと云ふ隣組長も二ヶ年續いて、御苦勞してもらつてゐるが能く出來た人物で、曾て模範隣組長として縣からも表彰されたことのある德望家であるが、更に隣組の中に正に天下に誇つて良い程の立派な指導人を持つてゐるからである。

人呼んで吐月先生と云つてゐる、姓は鎌田、名は喜太郎、これが先生の本名である。

先生は趣味として繪畫も書き、歌も詠む、わけても新聞や、文藝雜誌等に寄せられる隨想、評論の類は概して短文ではあるけれど、警世、示唆、反省と云つたやうな指導的なものが多いが、往く所一つとして佳ならざるはなく、而も文章は蘇峯學人張りとでも言ひたい程に無駄がなく、筆尖克く人の肺腑を衝き、と云つても秋霜烈日の連續でもなく、春風駘蕩のなごやかさもあり、時には人をして愼ましい笑ひを催させるユーモラスもあり多分に、情も血も含まれた氣品の高い筆致で、人を魅惑させ而も敎ふる力を備へてゐる、畢竟先生の人柄からそうなので別に不思議でもなんでもない、兎に角私の隣組には過ぎた、勿體ないほどの存在である。

と云つた理けで雅號だとか、筆名だとか幾つも使用されるが、その中の俳句に用ひる吐月山人の名がいつとはなしに先生の呼び名になつたらしい。

又先生はめつたに暇のない多忙な方で、豫備役陸軍大尉正五位勳五等功五級と云ふ肩書をお持ちになつてゐることだけ知つてゐるが、何しろ、私も北支方面から還つて日が淺く、當市の〇〇會社に勤めるやうになり移り住んでから隣組同士と云ふの外特別の交渉はないので、その出身や、閲歷を識るに由もないのである。兎もあれ、隣組人からは勿論だが、市一般の衆人から尊敬され、親まれることは並大底でない、況し

てや私の隣組のためには儼然たる長老的存在であることは言ふまでもない。斯く言ふと如何にも相當の高齢者に取れるが是がなか〳〵問題で三十八だらうか、まあ四十には屆くまい、或はいやもう先生は五十何歳ですよと云ふ人もあるがそうにも取れる、眞に若々しい元氣さで物事をどし〳〵やつてのける、一面また老熟しきつたやうな周密さもあるし、何人もが不思議がつてゐる、だから私はこの同僚のやうにも感ぜられる、また師父のやうにも感ぜられる吐月先生の風格には最初から好感が持てた、それは單に先生に對する尊敬とか、親み、信頼と云ふものゝ外に、此の吐月先生を中心として隣組内に温醸されてゐる、大戰下の國民生活に最必要なおほらかな明朗感がそれで、全く先生の人と爲りそのまゝの、隣組の姿に心の底から參らされてゐるのである。

これは私の家庭ひとりではない、私の隣組はみんなそうなのである。

先生の住居は、私の家から西へ五十メータばかり離れた山手に、南面した和洋折衷の平家建で樫、椿などの植込に圍まれた靜かな、環境の中に凝つと隣組を瞳めてゐる

★

さゝやかながら親子三人の、愉しい夕食を終つた私は、食卓の上に夕刊を展げて讀んでゐた。

――坊やは床の中に入つてゐた――。

暫くすると、吐月先生が他へ出掛ける前と、歸つた場合きまつたやうにやられる含嗽のがら〳〵が、裏口の方から聞へて來た。

坊やの寢姿を直してゐた家内は、

「もうお時間ですわ、御仕度なさつては如何。」

「ヨシ來た――。」

★

凡そ大人物ばかりの履物群が、十燭光に照し出されてゐる玄關に這入つた、私達も同じやうに履物を脱ぎ並べて座に上つた――隣組長の家である。

「今晩は……。」

家内も併せてお辭儀をしたらしかつた、

「やあ、御出でなさいどうぞこちらへ。」

正面に控へたM隣組長は斯うした聲と會釋を呉れた。

いつもの事だが、吐月先生は隣組長の右側にセルの袴を着け、黑無地の羽織を品よく羽をつて、底光りの中に和らか味のある眼なざしで愛相よく据つてゐられる。

「やあ奥さん今晩は、哲坊は又ねんねしてお留守番ですか?。」

「ハイ……。」

聞き取れない肯定だつた。

「いやあのくらひ、晝間の奪闘が激じいと、能く眠るだらう羨しいことだ。」

ふつと坊やの元氣振りが眼頭に浮んだ私は嬉しかつた。

こんな挨拶が取交されるうちに四十名近い、隣組人も集合を終つて定刻となつた。

型の如く隣組長の簡單な挨拶があつて、常會は開かれ、國民儀禮がいとも嚴肅に終た。その日の詔書奉讀は、一段と深い感銘を與へた。

次で隣組長から來るべき銅鐵回收や、市の節電訓練に對する上意の下達が懇切に行はれた。それから公債の割當購入に對する説明があつて眞劍なる協力が要望された。

これが終ると吐月先生が隣組長に、一揖してから、

「では、私からも皆さんに一つ……。」

と前置きされて――第二次ソロモン海戰を中心とした最近に於ける戰局の大要から大戰の將來に關する觀察、特に米の戰爭意識の熾烈化や、油斷を許さぬ戰力の擴充增强の眞相――是に對する我方の生産力の擴充、國民貯金に依る戰力の飛躍的充實推進の切要なる所以等に就て諄々と説かれ、最後に最早非常の國難だとか、だから政府はどうしろとか、國民の生活が不自由だの、不足だのと、なにか人間何人かの仕業かでもあるかのやうに、ぐづ〳〵議論を闘はす秋でなく、眞に食ふか食はれるかと云ふ國を擧げて總決算をすべき、土壇場に突き進んで來ました……。今隣組長から縷々御話のあつたやうに、一本の銅火箸も慾しい、電氣を起すための石炭一と掬ひも惜しい、一つ物を生産するとしても戰爭に捷たんがための何品かでなければならぬと、躍氣とな

つてゐる軍や、政府當局の今の氣持ちは、よく〳〵の事ですぞ、到底自分己人の生活のことなど考へて無中になつてゐるやうでは、此大戰爭はなか〳〵勝ち拔けませんぞ、大體日露戰爭以後の米國は日本さへ潰ぶせば世界に於て恐ろしいものはなくなる、自由になるといふ思想を持つて來たが大戰後は更に拍車をかけ一生懸命に熱を上げて來てゐる。敵國民がそれならば日本國民も彼れに優つた敵愾心と頑張りを以て、斷々乎として米英を叩き潰そうではありませんか、我々は上御一人の御爲にひとり一人が、九軍神にならねばなりません。と結んだ。

――咳一つするものもない、みんな奥齒をかみしめて文句なしに何ものかを固く期したと云ふ激しい雰圍氣のみ、屋内に充滿してゐた。

★

吐月先生のお話は訥々たる中に非常な力强さと明快さがある、如何なる發表をされても、それは先生自身の烈々たる愛國心と正義觀より迸り出る信念の表現である、だから能く聞く者の肚に應へる。例證も豐富だが、冗長さがないから聽者の神經を集中させる。また壯年者にあり勝な、衒ひも無い、容氣もない、さりとて老人の冷水とでも云ふべき差出がましさや、他人の話題を横取りしていらぬ敷衍や附言をするが如きキザな所もない、洵に自然的な巧まない美しさが人の耳にも眼にも映る。

結局は先生の純一無雜な正義觀と、高邁なる識見、高潔なる人格の流露であり德なのであらう。

今一つ先生の風丰全體に威あつて猛けからぬ慈味と寂があり、よく婦女子にも親まれるが公私の節度が明かで妄りに狃れしめない、眞面目なお話も、愉快に座談を交ふるときも馱辯を弄しないのも敬服したい、それから繰り言を云はれぬのも感心である、一度び慾して說くとなれば通俗的で、簡明直截、極めて要領よく隣組人に分らせる、詰り「隣組常會用話術」である。いつだつたか吐月先生のお話は永田秀次郎さんの話しに似てゐると云つた人もあつたがなるほどそんな所も慥にある。

ところで、然らば吐月先生は、概して理論に走る指導家か？　と云ふ疑問も一應生ずるであらうが決して〳〵、前にも先生は閑のない多忙な方だと書いたが、あまりにも

多面的な活動家なので枚擧するのが煩はしかつたのである。

その實踐の面に於ては、大底の場合先生が國民服に卷脚絆がけでゐられるのを見ても、凡そ想像がつくであらう——國民服は今日此頃敢へて珍らしくないか殆ど卷脚絆を常用されてゐる、と云つて勿論筋肉勞働者ではない——それほど無中になつて公私に東奔西走してゐられるので、時にはお目にかゝつて親しく御話でも聞きたいなど思つて見ても、隣組常會等のほかは殆ど望されない。こうした人柄であるから表てむき公事の方面は省いて茲には直接關係のある隣組の面から觀た所を一つ二つ拾つて見よう。

大東亞戰に入つてから國内も頓に民防空——家庭防空が强調されて來た、街の警防團では家庭防空の資材整備を急げ、近日内に警察署長の巡視があるからと布令を出した、先生は其の夜分團長の下に、わしの方は昨冬來一通り整備してあるから一應檢ておいてもらひたいと申出た、分團長が明くる日行つて見せて貰ふと、なんと警防團長さへ心得ぬ程の周到な、數々の整備がされてあつて——早速市民の見學者で三日ばかり賑はつた事がある。

夏の頃盛んに、主婦達に對する擔架敎育や救急法敎育が行はれた、何分にも敎官なる人が經驗が淺いし、さてやつて見ると縣の講習會などで自分で演習した場合と勝手がちがつたり、救急法にしても止血を施したら完全に止る筈の脈膊が停止されなかつたりして敎官も一緒に不思議がつたりしてゐる光景を、通り合せて見咎めた先生は、きがるに自宅から擔架敎程とか、救急法などを持つて行き先づ敎官にその急所要點を懇切叮嚀に敎示し與へて、この訓練をして優秀な效果を收めしめたこともあつた。

と云つても吐月先生は別に警防團の幹部でもないのである。

兎角、近來の指導人と言はれる人達の中には、國民貯蓄や、公債購入も重大なる國民の御奉公であることも、家庭防空の重要性も、人竝以上に識り盡してゐながら、多くの場合は巧みな理論と、辯口とで、純な誠實人を丸め込み、偖てその實行、協力となると、ちつとも指導人でも有識でもなくなる手合ひがあるが、眞に仕末の悪い存在であるとの聲を、一部の間に聞かぬでもなかつた。

凡そ斯うした部類の人間に較べると霄壤の差がある、正に吐月先生こそ、時局の要請する典型的な實行人であると、大びらに推薦しても異議の出やうのない人物である。

尙こんな事もあつた、或る婦人團體が生れる前からであつたが、結成されてからも、一と頃幹部婦人――時には有閑婦人とも言はれる人達――の間に盛んに、軍隊慰問だとか、傷病兵慰問とか、戰捷祈願のため何々神社參拜とか相當頻繁に行はれた、ここまでは別に問題はなく洵に結構なんだが、實は之を表面の看板に、其の序と云ふことに口泥して、温泉に一日浸つて來るとか、遊覽地巡りをやつたとか、何とか云ふ島に遊んで見たとか云つた樣な、稍々軌を越へた行き方が一般人の眼について來て追々とあの經費は何處から出るのだらうか?、と云ふやうな議論めいた事柄が人の口端にのぼつて來た。

そうすると、一方も敗けてはゐなかつた、自分達は人のお世話にならなくつても、自費で出來る自分なのだ、自費で以てたまに息きをやつたからとて然樣な非難を受ける筋はない――と出た。

其の時――率先人の上に立ち、範を垂るべき身分にして縱ひ自費であらうと、なんであらうと、とやかくの疑惑を一般會員間に抱かせることは、幹部としての責任を輕んずるものであり、また反時局的行爲たるを免れぬ、宜しく猛省すべきである――との注意を與へ、綱紀の一新を圖つたのも此の吐月先生であつた。

それから、間もない頃綱紀一新問題が原因であつたか能く知らぬが、おかしな規約が、役員の手に依つて出來てゐた事が分つた、規約と云ふのは會員が、會合の際缺席すれば何程かの罰金を納めれば良いと云ふ出席奬勵策から出たものであつた、がその運營が拙かつた、あの奥さんは罰金を出すのが惜しいので出席したんだそうな、なんてな事になつて、罰金も相當嵩むで行つたらしいが、その金が行衛不明だとか、幹部の誰も知らんのだとか、云ふ樣な問題が起きて、遂に一部の幹部は、引責辭職といふ事にまでなつて、かなり動搖した。

この時婦人團體が、こんな事では到底銃後の守りは覺束ないと、幹部ならぬ一平會員の身を以て敢然乘り出して、取拾、諒解、斡旋に、血眼のやうになつて奮闘し、眞

に日本の母の集ひであるらしい、清純にして而も熱烈鞏固な團體に仕上げたのが誰あらう、鎌田吐月山人先生夫人M子さん其の人であつた。

しかも其の後に於て、是非或る役員の椅子に著いて慾しいとの、會員一般の切なる希ひを固く辭して、辭職したる前任者に讓り過去の名譽を少しも毀つけず、飽くまで其の婦人を生かして、自らは相變らず平會員として、緣の下の力持ちに甘んじてゐられるのは、あまりにも有名な佳話である。

固より吐月先生の投じた注意が、どう響いてゐたのか、知るに由もないが夫人としては多少この方面の責任を感じられたのでは、なかつたらうか？　との想像は世間の何人も持つてゐた樣であつた、それにしても普通の凡庸婦人では出來られる藝當でないとして、激賞されたのであつた。

また、軍神古野少佐の生家に對し代表者を以てする弔問の口火を切つたのも、同夫人であつた——たしか婦人團體としては、イの一番ではなかつたらうか？。

と云つて、出過ぎてどうだと云つた樣な、人の指彈を受けたらしい世評を耳にした事もない。

次にこれはあまり古くない話で、翼賛選擧と云ふ樣な空氣が相當浸透して來た、戰時下には珍しい出來事であつた、勿論選擧と云ふほどのものでも無いが。

町內會長の交代推薦期に當つて、市の或る一部の舊人階級から手が廻つてゐたとかなんとか、眞僞の程は明かでないが、其の以前に新隣組長の出來上るのを、待つてゐたと言はぬばかりに、全然町內民の間にも町內會長推薦に關する準備的な、協議も何にも餘裕を與へず、新隣組長の初顏合せの晩に、而も投票に依て一氣に決めて終つた。

戰時下の今日此頃になつて最早、いまはしい特殊な工作があつたとは思はれないが、餘りにあざやかな手際であつたのと、出て來た新會長の顏も意外な人物であつたが故に、町內中に妙な噂を生んだ、當夜某隣組長は、再任であつたし何等用意をしてなかつたので極力、熟慮推薦にすべきを主張したが、元來自分の意中の人物は町內一般の夙に認めある人物であるし、變な結果になるとは夢にも考へず、概ね意見の一致は疑ひなしとの自信の下に、敢へて退場もせず他の隣組長の意見に應じ投票したるに、開

票の結果は、文字通り孤軍奮闘の上壯烈なる戰死で、續く者は只の一人もなしと云ふ慘敗を喫し、敍上の如き意外の人物が當選し決定されたのであつた。

これらの狀況を聞いて納らなかつたのは、吐月先生であつた、早速一町内民の資格に於て、

（一）こんどの新隣組長は、臨時常會の一回でも開いて一般の希望なり意見なりを纏めたと云ふ事實を聞かぬが、隣組人の民意と云ふものを聽きもせず、參酌もせず役權と心得てか、役德とでも云ふのか而も投票に依て、町内會長を決めたりする隣組長は、何處の隣組長でも落第だ、俺は好かん、それからそんな方法で、當選した町内會長こそいゝ迷惑で、恐らく町民の尊敬は受けまい、町民が協力せねば獨り相撲はとれまい。

（二）推薦を原則としてあるが、なんの必要があつて投票したか、根據ありや。

と云つた樣な意味の詰問書を、隣組長連に叩きつけた、隣組長は大いに存じよりのあつた問題であるし、泰然自若をよそをつてゐたらしいが、納まらないのが一般町内民で異常な反響があつた、と見るや吐月先生は、なに是は俺一個人の意見であつて、碌な答解でも得られるとは思つてゐない、後の事は隣組長自身の責任であるし、壯年團と云ふ若い者もゐるさあ、であつさり手をひいて忘れたかの樣にしてゐた。

俄然壯年團が活動を開始した、筋道の通つた正しい而も時局と町内の現實に卽した理論と、鐵の樣な團結力の前には、新隣組長及投票に依て決められた新町内會長も、出直す外はなかつた。三日間の後出來上つた結果は、一般の念望であつたちやき〳〵の町内會長が、副會長には壯年團の分團長が、其の他概して三十歳前後の若い係長級の顏が揃つて、如何にも清新潑剌たる氣分の溢れた陣容を整へ、町内民を悅ばせた。

この問題で嬉しかつたのは、擅斷、聾斷、役德漁と云つた樣な自由思想的な過去の遺物から殆ど完全に蟬脫した事と、何々長とか云ふ標札を玄關前に掛けただけで、一年中經つても顏も見せぬやうな無責任な役員と稱する舊人を驅逐した事と今一つは、壯年團の活動が町内會の幹部を、狙つてやつたのではないかと云ふ樣な感じを、微塵も町内民に與へなかつた事である。

あとから、壯年團分會長――新町内副長――より聞いた話であるが、そこには吐月先生の洵に適確な爾後の情況判斷と、綿密周到なる思慮の上に發した措置であつた事を知り、自然に頭が下つたのであつた。

こんな調子で、吐月先生も、夫人も世間人をして、本當に――うちの人――と云つた感じを與へる一種特別な味を持つた人達である、地味で、謙讓で、清廉でもある、又言行の總てが一點の雲りを含まぬ公明さがあり、而も一瞬のたゆみなき時代の變轉に對しても鋭い眼識を備へ、人心の機微を捉へることも極めて機敏で、一家を擧げて親切人の揃ひであると云ふのも近隣の――否世間の通評なのである。

だから世間の如何なる强力ズムも、其處に聊かの不純を介在する限り――この世の中を正しく强く歩む――吐月流一家の行動の前には手も、足も出ないのである。

一事は萬事と云ふが、先生の場合は萬事は萬事で、その家庭に於ても家人の悉くが此の流儀で統整化され、私共が隣組人として、知る限りに於ては何も彼も垂範的で少しのかりも持たぬ世に言ふ正眞正銘の――翼賛一家――である。

因に先生の持つ公私の職が算へきれぬ程ある中に、大政翼賛會縣協力會議員と云ふのもあるが、宜なる哉ではあるまいか。

★

――その月の配當公債も常會の翌日午るまでに消化したと云ふ事實を以てしても、結びとするに充分だが、茲に美はしい公債美談があつたから、特に書き加へたい。

いつ頃であつたか私は知らないが北九州の或る街から引越して來たと云ふ一家があつて、三年前息子達夫婦に先き立たれ身寄りもないと云ふ七十七歳になるお婆さんと、息子達の遺兒で十四歳になるといふ孫娘と二人きりの寔に氣の毒な、祖母孫娘二人が知人を賴つて來て私の隣組内の露路の或る小さな家に移り住んでゐた、結局は隣組人の同情と斡旋に依て近所の子供相手にラムネや飴湯のやうなものを商つて日々のたつきを營んでゐるが、永い間の生活苦に苛まれた二人は蓄へもある筈がなく、秋立つて來るにつれて早速着る物にも事缺ぐのは當然であつた、併しなんとかして此一家を救ひ、皇民として――其のところを得しむることが我が隣組に果せられた責任でもある